

「ウム」と、今更の様に思ひ出した。

「どしてだらう？」

「妙な家庭よ、お父さんとお母アさんと結婚した、そりや當前ね、そして出産たのが妙子さん、これも當前ね。それから二人は離縁れて了つたの、別れてから母は別の家に嫁入りしたの、父にも其の頃別のお嫁さんが出来てゐたんです。その後妻を妙さんはお母アさんと呼んでゐるんです。」

ところが何うしたとか急に妙子さんが生みの母の縁付いてる所へ來ることになつたんです、何だか然し自分を生んで呉れた母の様に思はれなかつたんです、そこで小母さんと云つてゐるんですつて、で小母さんはお母アさんとお云ひなさいよと随分云ふんだ相だすけど、何うしても聞き

入れないんですつて、妙ね」

「變な家庭だナ」

「貴方あの方と戀したら何う？」

「馬鹿な、まだ小さいホンの子供ぢやないか」

「子供ぢやないわ、夢中になり合つてる者さへあるんですもの、戀の經驗者だわ」

「だつて假りに戀に年齢の差別が無いとしても、そんな外に戀人のある様ぢや」

「それを横取りしたら何う？」

「馬鹿な。第一ちつとも戀して見たいと思はぬ人間だよ、あの女は」

「そりや何うしてせう？」

「何んだか其麼感じがして仕方がない」
 「でもいゝ肉體美よ、素敵よ」
 「あれで？」

「えい、女の私でさへ惚れくするわ」

「兎ても戀する氣にはなれない、どうしても友達だね、一體君は妙な性があるね、他人に戀を勧めて愉快がある性だね」

「えい、だつて横で見ても面白いんですもの」

「よく妬けないね」

「ちつとも？ ねえ戀して見なさいよ」

「止せつたら、其麼事を東洋の君子人に勧めると云ふことは大に良くない事だぞ」

そんなことと
 東洋の

君よに
 勧めよ

えふことよ
 大によく

ふも



之伊山

「君子人だつて！ オホホ………」と、高子さんは何日逢つても暢かな春の様なことを云つてゐる。それで仲々の確つかりものだから意外千萬だ、家でも高子なら夜泊りして來ても安心だと云ふ事程信用してゐる位だから、親としても充分に此の女の性格を知り抜いてゐるんであらう。

「貴方私し好きさ？」

突然妙な事を訊いた。

「好きだよ」と、此方も負けぢやゐない。

「戀仲になりませうか」

「さアならう」

「では戀人よ、早速散歩に連れ出して頂戴な」

「オよし、よし、ソラ手を握るぞ、胸がピクピクツツとするぞ、全身の血

汐が渦巻くぞ、いゝか」

「えゝ、いゝわ」

己れは手を握つた。

「ピク／＼となすつて？」

「いゝや少つとも！ 君は？」

「勿論よ」

「勿論したと云ふのか」

「えゝ」

「コラッ」と手を上げて思はず脊中をビシヤリ、二人は日比谷から銀座へ茶化し合ひながら散歩した、應て別れた、面白い性格だ高子さんは。

翌日妙子さんが突然何等の豫告なしに面會に來た、お母アさんが同伴である。

「オヤ」と云ふと、

「今寫眞うつしに行つて來たものですから、一寸歸り道でしたから」

「よくこそゐらつしやいました」と云ひながら、

「ヨー美しいぞ」と、妙子さんの肩を叩くと、

「知らないわ」と、嬉し相に微笑する。

「私し一寸君に話したいことがあるんだ、——奥様一寸あちらへ行つてゐて下さい。」

「オヤ——私は退けものですか」と、ズツと放れて了ふ。

「なアに？」と、妙子さんは不審相に私の顔を見詰めながら近寄つて來



た。

「妙子さん」と、笑ひながら腰をかけ、

「私は非常に靈感に富んでゐる男ですよ、それが殆んど百發百中です、だから嘘を吐いては不可ませんよ」

「え、」

「屹度ですね、それぢや私の靈感をお話しませう、貴女は私と初對面の時にある友達の戀話をしましたね、あれは貴女のことではせう？」

「……………」

黙つて笑つてゐる。

「左様でせう？ そんな感が犇々とあの夜眠つてゐた時襲ふて來た、確かに貴女に違ひない」

己れと云つたら、他人から聞いたどの、大學生やら高子さんから耳にしたなどは、變にも出さず、靈感で御座いと、巧みに靈感に獅噛み付いて遣つた。

「素敵な戀人だつてね」

「……………」

まだ笑つてゐる。

「それならそれと何故僕に打ち明けなかつたんだい、嘘を吐くと云ふことは悪いことだぞ」

「だつて……………」と、恥かしいんですものと云はぬ許り。

「楽しい？」

「……………」

「嬉しう？」

「……………」

萬事御推察に任かすと云ふ微笑振りだ。

「己れに本當に心を打明けて何んでも相談して來る様な氣になれないか、イヤなつて呉れたまへ、そしたら己れは君のよき味方になる、決して君の意志に反く様な後援はしないから。解つた？ 相談する？」

「えい、本當に私し」と、云ひ淀んで、

「だつてあの時の初對面でしたもの、初對面の時に幾程何んぼだつて私に戀人があるなんて云へやしなかつたんですもの。ぢや何卒宜しく」と、首を下げた。

「君は柄は小さいけど、仲々早いなア」と、意味深長に洩らすと、

「だつて先方がそりや熱烈だつたんですもの、どうしても厭と云へない様になつちやつたんですもの！」

「でも交つて以來どんな感じがする？」

「……………」

又笑つた。屹度いゝんだらう。

「まだ？」と、何を何時まで話合つてゐるんだらうと許りお母アさんが來た。

「もういゝんです」

「何を聴かされてゐたんです」と、ニコ／＼しながら母は娘の顔を見た。

「いいこと、ね？」と、ねと私の賛同を求めた。

「奥様に聴かせないこと」と、私も應じた。勿論母として此の私と妙子

さんが戀を語ると推するには餘りに馬鹿らしいし、それほど私を信用してゐたし、又妙子には今彼女が最も熾烈な戀の相手たる男がゐるから、勿論微塵も疑ふの餘地がなかつた、屹度二人は何か又どこかへ遊びに行くと言つた様な無邪氣ないさゞめきを強ひてこつそり語り合つて見た丈け位にしか執らなかつた。

「ね」と、妙子さんは急に口調を高めながら私を呼ぶ様にした。

「？」と、振向くと、

「今夜神田の青年會へ行くんですが、いらつしやらない？」

「何があるんです？」

「シコロのセロ」

「又シコロか？」

「え、今度は一高の主催で」

シコロには私は先日の慶應の時の空漠な會場の感が頭腦にこびり附いてゐた故か、急に賛同する氣にはなれなかつた、好さな妙子さんが行くんだと云ふ誘惑さへ何故だか私の心を充分に動かさなかつた。

「どなたと行くんです？」

「黒山さんの鹿見さんだの」

二人とも慶應で紹介された青年だ。妙子さん許りを己れ一人が占領して行けるんだつたら、無理にも行く氣になれたかも知れぬが、こんなに外の連れがあるんだつたら、唯さへ氣の進まないのに無理に行く必要がない。

「さア、私は止さう、このあいだ彼癡淋しい會場でシコロを聞いた故

か何んだか氣乗りがしなす」
 「さう？　ぢや強ひて」と、云ひながら、
 「もしやお出になるんならと思ひまして」と、一寸頼りない氣配と軽い失望を見せて「たゞそれ丈けを一寸お勧めに」と云ひながら、母親二人は直ぐ暇乞して行つて了つた。
 すると、間もなく知合の某夫人から電話があつた。そして私は今夜神田のシヨラのセロを聴きに參るんですが、ゐらつしやいませんかと云ふ勸誘だ、無氣に斷わり兼ねる様な勧め方であつたし、かつ妙子さんにしろ此の夫人にしろ、私の知つた者が斯うまで行くんだと思ふと、ツイ氣も其の方へ向いて了つて、それぢや參りませうと答へると、では切符は私が持つてゐますから、六時までに入口に待合はすことにしませうと云つ

て、到頭約束して了つた。
 今度は私から妙子さんの所へ電話をかけて、先刻行かないと云つてたけど、急に行くことにした、何れ彼方でお目にかゝりませうと一應觸れ込みして置いた。時間が來た己れは出掛けた。
 頃は夕食時分だったので、己れは何處かで済ませたいと思ふた、和食は暇がかゝるし洋食は神田では嘗て其の拙さ加減にツクツク後悔してゐたので、ハテ何にしたらいだらうと、コクリと考へた。
 神田の簀そばへ行かうか知ら、久々で簀そばも好からうと思ふた、然し簀そばは旨い代りに出して來る時間が長い、約束の時間には後十五分しかない、十五分の間に済む様な方法が無いか知らと須田町から小川町まで「何にしよう」と考へ込みながら歩いた。

フと左様だ！ と合點するが早いカスタコラと足を急いだ。
 何人も知つてゐるだらう、小川町の交叉點に三田方面から來る電車の正面に、一軒のそば屋がある、彼處のさしめんたら東京中探しても彼處限りしか出來ない唯一の看板物である、その又さしめんは、素敵に旨い、己れは三四年前時々彼處ののれんを潜つては舌鼓を鳴らしたものだ。それが此の頃サツパリ足が遠かつてゐる。大體うどんとかそばとかを餘り好きでない故からもあらう。それが急に喰ひたくなつたのだ、喰ひたくなつたと云ふよりも彼處なら時間の經濟上非常に都合がいい、又あすこなら客種が上等だ、斯う思ふて決心したんだ。
 ガラリと開けて入ると、可成の人だ、中には何處の貴婦人と思はれる許りの容姿がスル／＼と音させて喰つてゐた、己れがガラリと開けた

時流石に一寸氣極りが悪い様な氣でもしたのか、白い眼が大椀の中からチラと此方を見た、然し又直ぐ眼を落して旨相に喰べ始めた。
 己れの座つてゐる前には物々しい紳士が矢張りスル／＼といゝ氣持だ、隅の方にゐる白髯の老人は確か何處かで見えた某將軍だ、屹度散歩でに立寄つたんだらう。
 己れは註文した、勿論さしめんだ、此の家へ來たら何を註文するよりさしめんが一番いいのに、外の人達は其れを知らないのか知ら、みんな他の物を喰べてゐる。然し一人だけ、それは私と並んで座つてゐるセビロ服の今箸でつまみあげたのは確かにさしめんだ、彼は屹度自分一人で通がつてゐることであらう。直ぐ運ばれた、全く旨い、思はずスル／＼スルと走る様に吸ひ込まれる。洋食を喰つても和食を喰つても今では左ま

でに期待と美味を感じない様になつてゐた私は、時には此處ものが譯なく賞味されるのだ。寒い身體が急に暑くなつた。外へ出ると、寒い風がヒューと突き當つた。

青年會館の前まで行くと、素敵な人だ、陸續としてドン／＼入つて行く、そして又来る人も来る人も皆若き美しき女性を携へてゐる、あの紳士然り、この學生然り、みな左様だ。男同士ばかり、女同士ばかり、それ等は何んとなしに羨し相だ。若し女一人か男一人か一人で来た者は屹度門外内に誰かを待つかの様に來る一人々々を物色してゐた、己れも其の一員だ。

斯くて男の待つてゐた者は屹度女だつた、女の待つてゐた者は必ず男だつた、それぞれ愉快相に手を執つては奥へ／＼と進むで行つた、皆それ

等は中流以上の家庭の育ち顔であつた。時々自動車の前で止まつた、扉を排して下りる者矢つ張り男女であつた、それ等の顔には上流の氣品が何處にとなく漂ふてゐた。皆麼は左様云ふ具合に次第次第に片附いて行つたが己れの待つてゐる其の某夫人は仲々に遣つて來なかつた、己れは遅れて貰つては好い席を取られぬと云ふので氣が氣でなかつた、また其れに若し遅れて立席を餘儀なくされちや大變だと云ふので心配も萌してゐた。兎も角も早く／＼とヂツとしてゐるのが堪えられなくなつて、遂には足踏みして待つてゐた。いつか私はあの夫人に時間不勵行の時のあつた時、貴女の様な現代的の頭腦と智識の所有者が他人を待たすことを何んとも感じませんか」と氣色ばむでたゞした事がある、その時夫人は恐縮何んとも云ひ様がなかつた、そして事情を述べた、然し私は辯解

は聴きたくない、唯不勵行に對して反省を求めると可成猛烈に強く云つたことがあつた、それ以來夫人は逢ふ毎に決して時間を違へなかつた、その時には「貴方には一度ウンと叱られたことがあつたから」と屹度出た。

その夫人だから、よもや又嘗ての二の舞ひは踏むまいと思ふた。然し何うも來ようが遅いので時計を出して見た、約束の時間までに二分あつた。一寸私の方が早く來たらしい。然し若し此の二分が通過したら承知せぬぞとチツと時計を睨み、來る人を睨む様にして物色した。

さア時間だツ。きつと見た、來ない。おのれ不都合なツとムツとする。

それでも來ない、人の足は愈々繁く益々多い、氣が氣でない。

と、右の方の入口からサ、ツと車を乗り入れたものがある、幌が被つて

ゐて誰が乗つて來たのか解らない、が確か夫人に違ひないと思ふ節がある。それは嘗て帝劇へ行つた時矢つ張り其の正門で待合せた時に夫人は車で來た。「何故お宅から此處遠方まで車で來たんです」と其の時訊いたら、「だつて此うした風をしてゐますから、電車の中ですと、皆變してジロ／＼顔を見るんですもの、氣極りが悪くて」と云ふ話だつた。だから今も又屹度盛裝の爲め此處理由で車に乗つて來たんぢやなからうかと思はれたんだ、己れはチツと大分かけ距つてゐる薄暗の其の方へ眼を据えて、下りて來る人の姿を待つた。客は下りたらしい、幌が先方へ附いてゐたので姿は遂に解らなかつたけど、多分左様だらうと思はれた、然し萬一人違ひだつたら、其の方を熱心に見詰めてゐる間に此方の入口から本物が何も知らずにツカ／＼と入り込まれては、可惜今まで待ちあぐ

んだ甲斐もないことだと慌て、又此方へ眸を返へした、いや急がしいつたらない、眼はキツと配られた。

すると矢つ張り車で来たのは夫人だつた、夫人は若しや私が来てゐやしないだらうかと左右の立つてゐる人達を物色しながら、次第々々に私の立つてゐる場所へと近づいて来た、その時私は聲をかけた。

「奥様」

「まア」と、につこりして、進み寄りながら、

「お待ちになつて？」

「御覧なさい、七分過ぎました」

「七分、そんな筈は」と、云ひながら、ギョツとしながら、今度は自分の時計を帯から出しながら、

「いゝえ恰度カツキリです、御覧なさい」と、差付けながら、

「貴方のは七分進んでゐるんです」と、逆襲だ。よつほど又痛いのを聴かされるのが怖かつたと見える。

その時の此の夫人の扮装は全で侯爵夫人の様な観があつた。衆よ近づくと云ふ物々しい盛装振りであつた。

「奥様、素敵ですね、一緒に歩くのが眩しい感じがします」と云ふと、

「なんです、そんな事仰しやつて」と、夫人はにつこり笑つた。

受付はもう押すな／＼と云ふ凄まじい人氣であつた、漸つと通り抜けて中へ入る。幸ひな事には我々の札は一等席だったので、可成空いてゐた、三等席はみな満員であつた、取られては大變と夫人を唆かして急いで好座席を占領して、「先づよかつた」と云ひながら、眸を放つと、もう

ドシ／＼と次から次へと入つて来て、見てゐる裡に一等の空席も塞がつて了つた。もうスンでの事で立往生の憂目に遭はされるんだつた、二人は開會まで色々と話合つた。

「このあいだ帝劇の音楽會へいらつしやいましたか」と、夫人は訊く。

「行きました、然し直ぐ鶴見の花月園へ参りました」

すると、この會話の時、前に座つてゐた二人の少女の内の一人が、スツと後を振返つて私の顔を見た。何氣なく私も見た。少女はニツと笑つた。オヤと私も驚いて了つた、驚いた筈である、先日鶴見から歸りに電車の中で逢つたあの又なき品のある少女のそれでは無いか。私は「やア」と云ふ表情の下にニツと笑ひと、今度は少女がスツとお辭儀した。私も返した。すると其の少女の連れも振返つて私を見た。「となた？」と云つ

たげに曩きの少女の顔を見た、曩きの少女は其の連れに顔を向けたかと思ふと、少しく俯向き勝ちになつて小さく囁いた、屹度あの時の電車のことを聽かせてゐるんだらう。私も奥様に「實は先日」と話して「その少女が此の人です」と密つと前に座つてゐる後を指して云つた。夫人は横から覗く様に顔を見詰めた。

「全く品のいゝ少女ですね」と、矢つ張り驚いてゐた。

恰度そこへ一高の帽子を被つた學生が其の少女の所へ来て何やら話込んだ。顔を見ると何處となく面ざしに似た所がある。

「兄さまですか」と、後から訊いた。

「ハイ」

「ちや貴娘のお隣の方は妹さん？」

「ハイ」
 妹は姉に比す可くもない程落ちて見えた、品位も無かつた。
 私はいつ逢へるか解らぬ残り惜しさを以つて此の前この少女と別れて了つたんだが、測らず此の音樂會の席上で、而かも列を同じうして座り得たことが奇蹟の様な喜びであつた、私は若し東京を代表する眞の女學生型を選び出せよとあらば何うかして此の少女を代表的にしたいものだと思はれた。どこにも此處にも間然する所がなかつた、洵に恐らく全國どこを探しても此の少女の如き美しさと品位と姿勢と言葉を持つたものは見出すことが出来ないであらう。
 「妙子さんはもう來てゐるだらう」
 斯う思ふて私は後を幾度も振返つた、然し何うしても發見に苦しむだ、



之伸志

夫人
私
ツ、

一寸は南見

二階も見上げた、それらしい姿が少くも二階の半面だけでは確かに無かつた。幾度も／＼私は振返つた、あまり振返へることが私と云ふ人間を軽く他から見られるの憂がありやしないかと思はれるまで振返つた、然し遂に得る所が無かつた。

「一寸御覽なさいな」と、夫人は私をツ、いた。

「え？」

「向ふのそれ今男の方の影になつた、あッ今後の方に話合つてゐる、女の人、若い、お解りになつて？」と、一方を頷で指しながら云ふ。

「今笑つて、今口へ手をあてたあの嬢さん？」

「え、お解りになつて？」

「解りました」

「あの顔は大きくなるに従ひ益々綺麗になる顔ですよ、美人型ですよ、素敵な美人になりませすよ、そして上品ぢやありませんか、オーあの襟の白さ」

それは十八九歳位のお嬢さんだつた、矢つ張り何處となく大家育ちがホノ見えた。

「オヤまあ可愛い、眼!! なんと云ふ可愛い、眼でせう!! と又一人發見して、ね、あのお嬢さんの後にゐるお嬢さんのあの眼を御覽なさい、美しいつたら無いでせう、何んとい、眼でせう、見えて？」

「いゝや」

「オヤ横にゐる大きな男の身體で隠れて了つた、今度よく御覽なさい、……あッ早く」

正面へ向き返した己れの眼は此の注意を受けると、急いで又見た。成程美しいと云はうか涼しいと云はうか滴る様だと云はうか、うるみを含むだ其の眼は云ふに云はれぬ味はひを持つてゐた。

「天下一品ですな」と、夫人は飽く迄も激賞した。

全く當夜の此の音楽會は東京中の所謂善良なる家庭の若き女性を一堂に集めたかの觀あるが如き一粒揃ひのみに満たされてあつた。どの顔にもどの顔にも東京と云ふ印を押した様な華やかさと明るさが宿つてゐて、而かも其れれ、品位を保つてゐた。男も一高大學生の外は大抵若き貴公子や中年の紳士のみで占められてゐた。見知りの大學の先生の顔も私の後に二三續いてゐた。矢つ張り一高の主催には集まるものも違ふと顔かざるを得なかつた。

斯くて愈々開會が宣せられた、その頃の場内は人を以つてギツシリ見動きもならぬ様に、四壁は唯眞黒に眞赤に立ち集つてゐた。恐らく場内も此の大入りだから、幾百の人達は屹度門前から空しく追はれたことだらうと推察を逞しうした。

例に依つてシコラの天才的な顔と、あの慶應で見た花の如き美貌のヒルベルケ夫人が現はれるや、緊張し切つてゐた満場は破れよと許り拍手喝采を續けた、二人は煮えかへる様な此の凄まじい人氣に感激の紅潮を頬に浮べて張り切つた様に沈黙の裡に座つた、愈々茲に微妙なる樂音の旋律は調べられた。讚嘆と驚駭と恍惚との外場内には何もなかつた、偉大なる天才はほしいまゝに人の魂を弄し、或は歡喜にわなゝかせ、或は哀愁に聲を閉ざして了つた。

それが一せつ終ると、暫らく休憩。

「まア宜かつた、先日と全つきり違う、先日は入が少かつた故か、少つとも此の様に緊張しなかつた」と云ふと、

「オヤ貴方も慶應へいらしたんですか」と、奥様は訊く。

「行きました！」

「左様ですか、私も行きましたよ」

「奥様も？ 少つとも氣が付きませんでした、どこにゐられたんです？」

「後の方に、暫らく立つてましたよ、でも人が少なかつたので、直ぐ歸りましたけれど、さうね廿分位はゐました」

「左様ですか、氣が附かぬ筈がない筈でしたがなア、あの雨の日ですよ」

「え、左様です」と、奥様は答へる。あの少ない人出の時、何うしこ

私は見出せなかつたんであらう、若し私が夫人を發見することが出來たなら、屹度淋しい想ひで歸すことをしなかつたものを。私とて又時ならぬ喜びで少くも語合つた丈けでも愉快であつたものを、斯う云ふ場所では知合を見出すと云ふことは何んとなしに華々しい氣持を心に宿すものである。

「いつ來たんですか？」と、突然この時夫人に聲をかけた者がある、見れば脊の高い一高生だ。

「開會一寸前に」

「左様ですか」と、云ひながら頻りにジロ／＼私の顔を見てゐたかと思ふとスーッと去つて行つた。

「どなたですか？」と、訊いた。

「あれが私の長男です」

「まアあの人ですか、ホー」と、今更驚いて、

「そんな事ならもう少しよく見るんだつたに」と、潘すと、

「實は今日私も音楽會へ行くんだと宅にゐて申しますと、どなたと？」

と訊くものですから、貴方の名を云ふと、ホーどんな方か是非見たいから、母様知らん顔してゐて下さいと云ひましたので、えいと答へて家を出たんです。

先刻から向ふの隅にゐてチツと此方を頻りに見てゐたんですよ、ハア貴方の顔を頻りに見てゐるなと思ふてました、到頭遣つて来て、今度は近寄つて見たんでせう、ホッホ

「そんな事ならもし少し謹嚴な顔をして済まし込んでゐりや宜かつた」

と、私も笑ひ興しながら、

「奥様、一寸失禮します」と、立上がつた。

「ハアどうぞ」

己れは妙子さんの存在を見たかつた、ズーツと人と人との間を割つて廊下へ出て、先づ小用にと行く途中、先刻夫人が「あの嬢さんは大きくなら程美しくなる素質のあると云つた令嬢が若い紳士と、「やア今日は「今晚は」と挨拶しながら別れた突嗟を見た其の紳士も小用に來た、すると又其の男の連れらしいのが後から來て、其の紳士に、

「今のは？」と、訊いた。

「あれ？ あれはね鎌倉の海水浴で友達になつたお嬢さんだ、名は確か安田春子（假姓）と云ふた」

「美人だね」

「美人だね」

二人は其れ以上會話しなかつた、何故なら己れがゐるから。己れのみならず多くの更に詰めてゐた連中の手前、女の話をする事が其等の體面から遠慮したらしい風であつた。

安田春子!! 私の頭腦へ附着いて了つた。

妙子さんは屹度二階に違ひない、左様思ふて二階へ上がつて行く拍子にビタリと先頃慶應で妙子さんに紹介された、そして又妙子さんが其の人と來ると云つた黒山君に逢つた。

「やア」と聲かけながら、

「妙子さん何處に?」と、突如訊いた。

「二階のズツと隅の前に」

「どつちの隅に」

「右の隅に」

右の隅なら先刻階下から見上げた時も解らぬ筈だ、何故なら私は右の隅の階下にゐるんだから。だから左の方だけしか見えなかつたのだ。

登り詰めて見ると、ドアの所がもうギツシリ詰め切つてゐる、覗くことだに出來ない、「オイ黒山君、こゝ?」と、階段の中途にゐた黒山君を呼んで、指さして訊くと、「左様です」と云ふ。それではと厭無理に他人を掻き別けて入らうとすると、「駄目です、駄目です」と人々は制した。途方に暮れてゐると、今度は内から外へ出ようとしたものがある、もがきにもがいて漸つと其の男が死物狂ひになつて外へ出た、その拍子に僅か

な間隙を見出した私は「それッ」と許り其の虚を突いて、外から内へと押され潰されかゝりつゝ、到頭苦しい思ひをして中へ入つた。

妙子さんは？ 妙子さんは？ と一心不亂に八方に眼を配つて探し求めたが、餘りに人の多い故か何うしても發見することが出来ない、せめて一目たりと思ふて眼を皿の様にして物色したが、それでも解らない。その裡呼鈴が鳴つた。

「仕方がない！」斯う諦めを付けて今度は再び出ようと試みたが、氣の荒い書生さん連中から「無理ですよ」と叱り付けられて、出るに出不れず途方に暮れて、「濟みませんが一寸通して下さい、濟みませんが、恐縮です」と、そこ等中の頭と云ふ頭を三拜九拜、いや無理に拜み倒して漸つと僅かばかりの血路をあけて貫つて、絞め殺される様にされて、漸々

抜け出ることが出来た。オー苦しい。そこに黒山君が又ゐた。

「君、妙子さんと一緒だろ」

「うゝえ」

「？」

「妙子さんはお母アさんと一緒です」

「ホーお母アさんも来てゐるのか、君達と一緒にぢやなかつたのか」

「一緒に来る筈でしたけど、時間の都合で」

「左様か、ぢや其の二人限り？」

「まだ外に二人の婦人連れて」

「合計四人だね？」

「左様です」

「君、後で逢ふだらう、逢つたら宜しく」
「解りました」

階下へ下りて行くと、今度は座席まで通れなかつた、洵に未曾有の大入だ。

すると恰度有難いことには先刻の安田春子と云う美しい令嬢と其の連れが此の時同じく席へ戻つて行かうとしてゐる。何しろ可憐な女性だからと、男の爲めには無理にも通路をあけて呉れなかつた人々も其の優しい姿の前には意地も捨てざるを得なかつた、彼等は「御免遊ばせ」の爲みたいな聲にホロリと參つて、身體を斜めにして除けてゐた、だから己れは其の令嬢の後から直ぐ續いて行つた、お蔭で一言も文句なしに通ることが出来た、飛んだ餘慶に與かつたものだ。

「どうも失禮しました、一人可愛い、知合のお嬢さんが来てゐる筈なのが何うしても見附かりませんでした」と、夫人に云ひながら座ると、

「此の人込みですもの」と、應じながら、

「今ね、貴方のお留守中、長男が来て行つたんですよ」

「ホウ」

「斯う云つてました、他見男さんて彼嬾軟かいものを書く人だから、どんな人かと思ふてゐたら堂々たる紳士ですね、軍人の様な魁偉な容顔の方ですねと吃驚してましたよ」

「他人は見かけによらんものですね、ハツハ、」と、己れは高らかに哄笑した。

この時大學生の一人が、

「奥様少し無理にでももう少しお詰め下さいませんか、そして私をかけたして下さい」

と笑ひながら云つた。

「オヤ眞塚さん」と、夫人は身體を小さくし、同時に私に「モ一寸此方へお寄りなさい」と云ひながら、「此の方御存じでせう？」と私に云つた、私は顔を見た、見覚えのある顔だと思ふ間もあらず、先方から「暫らく」と挨拶された。

「どこかでお目にかゝつた様でしたね？」と、私が云ふと、

「え、あの菊地さんのお宅で、一昨年の冬」

「あゝさうだ」と、私は思はず小膝を打つて「さア何卒」と夫人の方へグイグイ詰めた。

「そんなに押して頂いちや私が飛上がつて了ひますよ」と、云ひながら、次第にデリデリ詰める、お蔭で僅かの空席が出来た。

次はヒルベルク夫人のピアノの獨奏であつた。實に何んともカンとも云へぬ旨さが、解らぬながらも實に旨い、小指の走りは恰も電気でもかけられた様、そして花の如きあの顔、あゝ何んともカンとも云へぬ。

「なんて可愛い顔でせう、全て十五六のお嬢さん見たいぢやありませんか」

「人形の様ぢやありませんか」と、賞めるに適當な言葉の無いのに窮する位

喝采々々大喝采。

再びシコロのセロがあつて終り。

げに稀れな緊張振りであつた。

「さア出る時は又混雑だ、急ぐ必要もないので「ゆつくり出ませう」と申し合せして、

「奥様直ぐお歸りですか」

「はア」

「どこかでコーヒでも飲んで歸りませうか」

「え、私も何か飲みたいと思ふてゐたんですから」

「それでは」

「え、」

そろ／＼と出て行つたが、下足口は狭い故か其處には又も押し合ひへし合ひが始まつてゐた。

「ヤア大變な人だなア」と、呟きながら、何気なく夫人は？ と後振向く途端、オヤツと思ふた、珍らしや沖村さんだ。

「ヤア久濶」と、思はず聲をかけた。

「オー之は意外な」と、沖村さんも驚いたらしい。更に己れが驚いたことには其の沖村さんの連れてゐる二人の令嬢の内一人は確かに先刻夫人が口を極めて其の眼を賞め稱へた其の嬢さんである。

「貴方のお嬢さんですか」

「ヤア」と、いつもながら偉大なる音聲だ。

「左様ですか、まア大きいお嬢さんがあるんですね」と、ニコ／＼して二人を見た、二人も見返へして微笑むだ。

すると其の令嬢の連れに之は又意外な、先刻「大きくなればなる程美し

くなる」

所謂安田春子さんまでがある、矢つ張りほゝえみを私に向けてゐた。

「ちや又」

何しろ込み合つてるので、碌に言葉も交はすことが出来なかつたので、私は斯う云つた。

「どうぞ是非お遊びに」

「ハア」

之れ丈け云つて早くも他人の爲めに互は遮られて了つた。

沖村さんとは去年輕井澤で知合になつた有名な紳士である、二人の令嬢があると言ふことも、その令嬢が虎の門に通ふてゐると言ふことも、虎の門と云ふ學校は幾程勉強が出来ても金持ちの家の娘でなくちや入學れ

ぬと云つた様なことも、恰度歸りの列車が同じだつたので、色々と話合つたんだ。

して見ると沖村さんの令嬢の連れたる安田春子さんも確かに虎の門の才媛に違ひない、成程こんなお嬢様を見ると始めて虎の門と云ふ名に反かない様な氣がする。

夫人と私とは幾度か群集の爲めに放れくになつた、漸つと一緒になつたかと思ふと又放れた。放れては見出し、見出しては放れ、その度毎に「大變な人ですね」と屹度口から出た。

「オヤ妙子さん」

突然見付けた私は叫んだ。

「あらッ」

彼女は左様應じた瞬間、早くも人込みで見えなくなつて了つた。漸つと廣場に出る、そこに先きになつた夫人は待つてゐた。

「どうも」と、云ひながら、

「行きませう、先刻云つてた……」

すると夫人は、

「私し此處で失禮します」

「どうして？」

「只今大學の人達が四五人も、それ此處にゐらつしやる方達が」と、密つと後姿を指さしながら、

「是非お見送りしますから一緒に歸りませうと仰言いますから」

「あッ、それなら好都合でした。では又」

「え、何れ又」

夫人が一緒に行けぬものなら、妙子さん母娘でも誘はうと、私は急いで門の外へ出て彼女の姿の發見に務めた。

オ、あすこにゐるのは！ 私は駆けた。

「やア」と皆變に挨拶してから妙子さんに近づき、

「コーヒでも飲みませんか」

「え、私と小母さんだけならいゝんですけど、外に二人も連れが、それに黒山さんも斯うして待つてゐるんですから」

「ぢや仕方がない、では」と、私は到頭ひとりポツチになつた。一人でコーヒは味も氣もない。え、ッ仕方が無い歸らうとヒラリと電車に飛び乗る。動き出す時、妙さん一行が向ふから遣つて來た、話で氣が附かな

私は
た
ー
ー
仲
志



う
ー
ー
ぶ
っ
ら
に
ま
よ
っ
た

かつたらしいけど、妙子さん丈けは私の電車に乗つてゐるのを見附けたらしい、白い顔が笑みを含んで軽く垂れた、私もそれに應へた。この最後の印象が淋しい單獨の悲哀から私を救ふて呉れた、私は今彼女が與へた微笑に勇を得ながら運ばれて行つた。

○
次の日、己れは静子連れて外へ出た、小石川の植物園へ行くのも寒いし、日比谷公園も進まなかつたし、一層かねてからお嬢様を見たいく是非一度連れてお遊びにと妙子さん一家が始終云つてゐたから、恰度静子のオーパーが新調早々だつたし、それを着た静子は又格段の美觀を呈したから、その儘電車で妙子さんの家を訪ねた。
全く静子のオーパつたら素敵なんだ、又と得難い上等物である。

先達大原君と銀座の夜を散歩した時に、フト關口洋服店の飾窓の前に立つた、そこには何んとも云へぬ美しい子供のオーバーが掛つてゐたからだ。

「實にいゝぢやないか」と、大原君は恍惚して云つた。

「素敵だね、色と云ひ模様と云ひ」と、己れは應じた。

「若し僕に女の子があつたら、此のオーバーを買つて遣るね、財産を棒に振つても買つて遣る、之を着たら何變田吾作の子でも人品が違つて來る、あゝ女の子の無いのが惜しいなア」と、垂涎をかざるの様だ。

「幾程だらう？」と己れは値段を凝視した、屹度驚く可き高價なものと云ふ豫想は附いてゐた。

「屹度高價いだらう、まア冷評かし半分聽いて見よう」と、二人は中へ

入つた、そして番頭に「あの前に掛つてゐるあのオーバーは？」と訊いた。番頭は「どれですか」と云ひながら隨いて來た。

「あれです」と、指した。

「あれですか」と云ひながら番頭は値段を云つた、果して想像に近い價格だつた。ハ、アンと二人は顔を見合せながら又外へ出た。

大原君と別れて、家へ歸つてから妻に此の事を話すると、そんなに良いオーバーですか、でも値段がと一寸尻込みの體だつた。

實は静子には過日三越でビロードの素的な洋服を拵へて遣つた、それを着た静子は平生の静子でない貴公子の息女と云つた顔だ。その洋服も、同じ作るなら最上のものを」と云ふ方針で拵へたものだから、子供の洋服としては贅澤極まるものであつた。

次に去年までのマントは妹の赤坊の方へ譲つたので、何うしても之を作らねばならなかつた、それは本郷の大河内で拵へさせた、三越で静子の洋服を作る時此方の註文通りにして呉れなかつたのみならず、出来あがつたのが思ふてゐたのと大分かけ距つてゐたし、それに洋服部の應接の男が口先さばかり旨くて少つとも實が無かつたし、且つ妻のコートを作つた時にも袖口の所を赤く焦してその儘渡したりして、旁々不快續きだつたので、或日この事を知合の婦人に話をすると、子供の洋服だつたら大河内ですよと教へて呉れたので、大河内にした。もつとも大河内では去年の夏鹽原へ行く時矢張り静子の夏服を註文したことがある、出来あがつたものは實に見事なものであつた、今度洋服も大河内で拵へる筈の所、ツイ家族三人で三越へ来たので、序だからとウカ／＼と洋服部へ

來、かねて見込みを附けてゐた布地のあつたのを幸ひ註文して了つたんだ。そして失敗を招いたのだ、この爲めに時ならぬ夫婦喧嘩も始まつたものだ、大河内で作つたマントは實は和服にも洋服も、間に合はず様にと云ふ方針だつた所が出来あがつたのを着せて見ると、和服には丁度いい恰好だが、洋服に着せると、ダラリと垂れた、地面とキツスばかりする。そこで妻の曰く「安いのもいいからオーバーを一枚買つて遣りませう」と我輩良君に相談を持ちかけた、良君は其の時何も云はなかつた。何故なら買ふなら最上と云ふ方針である、だから若し又静子の爲めにオーバーを新調したら、随分費されることになるからだ。然し何んと云つても可愛いのは我が子である、斯うして良いものを見出して來ると、ムカ／＼と買つて遣りたくなる。静子としては良いものを

着せられ様が悪いものを着せられ様が我れ不關焉であるが、親が斯うするのには子を喜ばす爲めでなくて親自身が其れで喜ぶたいのだ。

「ま、散歩旁々行つて見て來たまへ、あんな良い品でないよ」

「だつて値段が」

「いゝからま見て來たまへ」

「ちや行つて來てよ、どうせ資生堂へ白粉を買ひに行かなくちやならぬのだから」

斯くして出て行つた。歸つて來て、

「なんて素的でせう、あれを此の娘に着せたら見榮へがするでせうね」

「そりや勿論さ、だから見て來いと云つたんだ」

「買つて遣りませうか」

「そんな事は己れに相談しなくても、買へると云ふ確信があつたら買つて遣りたまへ」

「餘り高價いからねえ、でも考へて見ませう」

然う云つてる裡に土曜日が來た。

「君、今夜は屹度あのオーバーは賣れて了ふよ」

「何故？」

「明日は日曜日だから、今夜は随分澤山良い家庭の人が散歩に出るに違ひない、その時フィと買はれて了ふよ」

「惜しいわねえ、實は先日あれを下して貰つて一寸静子に着せて見たんですよ、恰度いゝんです。その時店員が云つてました、之は二枚限りしか米國から來なかつたので、今之一枚しかありません。注文なすつたつ

て布地が無いんですと云つてましたよ、だから若し彼れを買へば日本で二枚着てゐる裡の一人になるんです、先きの一枚を買つた方は何んでも近衛さんだと云つてました」

「近衛さん、ぢや静子は近衛さんのお姫さんと對になるのかい、大變なことになるつちやつたなアー賣れたら駄目だ、直ぐ買つて遣りたまへ、都合がいいんだらう？」

「え、何うにでもなりますから！」と、妻は急いで静子に洋服を着せて出掛けて行つた。間もなく歸つて來た、オー何處の華族の姫君かと思ふたら！ちツ、ちツ、ちこちやんかツ。

「ヨー可愛い、可愛い」と、抱き上げ抱き下ろし、或は歩かし、止らし、「可愛い、可愛い」と連發した。

妻は小鼻をうごめかして、

「私ね之を着せたら、兎ても我が子の様に思はれなかつたんですよ、餘り嬉しかつたので、銀座の町を用品もないのにブラリ／＼と歩いたんですよ、振り向かない人てありませんでした。皆まア可愛いと前から來る人はニコ／＼笑つて見て行くんですもの、中には頭をスルツと思はず撫で、行く人さへありました。資生堂でも左様です、いつもツンケンして應對するんですけど、今日は此のオーバーを静子が着てゐたので屹度身分ある家柄の奥様とお嬢様と思ふたんでせう、ホッホ、子供の爲めに親の私までが伯爵夫人よ、ホッホ」と、いやに御機嫌がいい。

それからと云ふものは滅多に静子連れて外へ出ぬ己れまでが静子や、静子やと猫撫で聲そしてソレツオーバーと一番先きにオーバーを箆筒か



と伸ぶ

ら引つ張り出して遣る、斯うなるとオーバーが可愛いのか静子が可愛いのか解りやしない、兎に角静子は何處へ連れ出しても恥かしくないのだ。妙子さんの家へ入つて行くと、

「オヤマアお嬢様も御一緒、まアお可愛いこと、さア、さアお入り」と、お母アさんが飛んで出て来る、續いて妙子さんも「オヤマアお可愛い」と云ひながら、早くも静子の手を執つて奥へ案内する。

「父ちやま、こゝ何處？」

「姉ちやまのお家」

「どこの姉ちやま？」

父ちやま參つた哩。

お菓子が出た、果物が出た。

「お名前は何んと云ふの？」と、妙子さんは静子の顔を覗いて訊いた。
 「ちこちゃん！」と、静子はハッキリ答へる。すると、
 「ちこちゃん孰れがお好き？ お菓子？」
 首を振る。

「ちや此のおみかんは？」

今度は頷いた。妙子さんは蜜柑の皮をむいて静子ちゃんに與へて、私に、

「何うしてお菓子お嫌ひなんでせう」

「今そこで喰べて来たから。ねえ静子ちゃん左様でせう」

「さう」と、簡単な返事だ。コーヒが出た、飲物は静子も己れも大好物
 直ぐ飲んで了つた。

「ねえお嬢様、お嬢様は何處がお好き？」

「三越！」と、明白なものだ。

「まアハイカラさんですと、ちや三越へ御案内ませうね」と、云ひ
 ながら、「今買物に出ようと思ふてゐた所、恰度よかつた」と云ひながら
 一寸身支度の爲めに立上がつて行つた。奥様の支度が済むと今度は妙子
 さんが入り代り立つて行つた。

「お可愛いでせう？」と、奥様は訊く。

「何しろ一人ツ子ですから」

など、話合つてる裡に妙子さんも化粧した顔をスーッと見せて来た、で
 はと皆立上がった。

玄關を出ると、見知らぬ若い奥様らしいのが一緒に出た。

「御紹介します、之は兄の嫁です」と、奥様は云つた、首下げた。

静子を圍んで若い二人は先きに歩いた、私と奥様は二間程後から隨いて行つた。

「温順し相です、ね、あの方は」と、嫁さんを一目見た印象を云ふと、

「そりやもう温順しいつたら彼も温順しいのは何處を探したつてありません、一日中無口のことが幾日もあります。あれで下田さんの實踐女學校を優等で卒業んですよ」

何んとなしに淋しい暗い感じが其の人の面影を蓋ふてゐた。私の好きな華かな所は微塵もなかつた。

「ねえ奥様」

「え？」

「妙子さんの事を何うなさらうとしてゐらつしやるんです」

「妙子の事と申しますと」

「あの中學生のことです」

すると、非常に驚いた表情で私を見上げて、

「え？ 御存じなんですか」

「知つてますとも？」

「妙子が申してましたか？」

「いゝえ」

「ぢや何うして御存じですか？」

「そりや知つてますよ」

「まあ驚いた、早や貴方の耳へ入つて了つたんですか」

「何うなさらうと思ふてゐらつしやるんです？」

「全く私も此の問題にはツク／＼困り切つてゐるんですよ、第一身分がね餘り距つてゐるんでせう。それに男の方が若いんでせう、十八ぢや何もお話になりませんよ」

「だつて妙子さんを強い執心だと云ふぢやありませんか」

「強い所か若し断わつたら自殺でも仕兼まじい勢なんですもの」

「そんなに想ふてゐるんですか、で妙子さんは？」

「あの娘は、何分理性の勝つた女ですから、それですら大分動かされてゐるんですからね」

「困りましたね」

「全く困り切つてゐるんです。でね私としては斯うしようと思ふんです、それよりは方法が無いんですから、それは男の方が洋行すると云ふ

んでせう、洋行するにも結婚の承諾をして呉れなきや洋行しないと云ふんでせう、だからハイ解りましたと兎も角も承知して洋行させて了はうと思ふんです。そして倫敦へ行つて二三年経つてから、突然妙子は都合あつて餘所へ嫁入りさせましたからと云つて遣る積りです。

全くあまり世間見ずですから、その頃になつたら屹度氣も變るだらうし妙子のことなんか思はない様になつてゐませうから、存外平氣でせうよ」

「イヤ其慶事はありません」と、強く打ち消して、

「一體先方の両親は本人が結婚の承諾しろの、するなのと其慶事云つて騒いでゐるのを知つてゐるんですか」

「知りません」

「知らない位なら話にならんぢやありませんか」

「でもまア本人と一度逢つて御覽なさい、可哀相になつて斷わり切れな
いんです、一寸でも氣に障る様なことを云ふと、私の膝に顔を押し當て
てポロ／＼泣くんですよ」

「それぢや奥様が先方の親に逢つて、御本人は斯々云つてゐます、で無
くちや洋行しないと仰しやつてだが何うしますと相談して行つたら何う
です？」

「それをして呉れるなと本人が云つてゐるんです？」

「何故？」

「恥かしくて親に合はす顔がないと云ふんです、本人はまだ親が知らぬ
ものと思ふてゐるんですからね。そして本人同志が約束すれば其堅い
ことは無いでせうと云ふんです、そりや左様かも知れませんが、十八

ぢやね、お話になりませぬわ」と、十八が大に物足らぬらしい。

「で話は戻りますが、そんなに一生懸命に想ふてゐるんだつたら、若し
妙子さんが結婚したと聞いたなら其れこそ自殺しませぬか」

「大丈夫でせうよ、その頃は大部分世の中が解つてゐませうから」

「さア其れは何うだか、初戀の力が強いものですからな、奥様も御存じ
でせう」と、グイと一本突き込んで見た、奥様は「そりや」と云つた限
り後はスウとも云はなかつた、屹度覺えがあるんであらうがな。

「でも左様して兎に角洋行させなかつたら、いつ迄も日本にゐたら此の
儘ズル／＼ズルと進む許りですもの、此方も其爲めに婚期を伸ばしち
や詰らないですからね、ね左様でせう屹度貰ふと云ふ確信が無いんです
もの、本人があつても親が無いんですもの。親はテンで子供のことです

からと問題にしない様にしてゐる風が見えるんです。面白いことがあるんですよ、私が始めあの方から妙子に宛てた手紙の一切を親御さんに送り届けたら、親御さんは其れを讀んで、オヤ彼子は何日の間に此處文章家になつたのか知らると、或日あの方にお父さんがお前は仲々作文は上手だね、後日文章家になつたら何うだと仰しやつた相です。するとあの方はまさか此方が艶書を親許へ届けたなどは露知りませんから、どこでお父様は僕の作文を讀んだのかと不思議がつて、どこで御覽になりましたかと訊いたんだ相です、すると或る所でとのみ何も仰しやらなかつた相です。向ふの親としては息子が若しや羞羞と興奮の爲め何を仕出かすかも知れぬと思ふて、態と素知らぬ顔してゐらつしやるんだ相です。親御さんが左様云つてました。全く困つた問題ですよ。

ねえ貴方、よくお考へなすつて御覽なさい、私が左様執るより仕方がないでせう？」

よく考へて見れば見る程どうすればいゝか解らなくなつて来る。戀を裂くのも罪だし進めるのも考へものだ。

「まあいゝ具合になすつた方がいゝでせう、飛んだ羽目になつたものだ」と、云つてる所へ、

「何を其處に話込んでゐるの」と、妙子さんが餘り我々の足の進みが遅かつたのに業を煮やして、到頭飛んで来て嘔鳴つた。

「ハイ／＼解りました」と、奥様は慌て、口を閉ざして「さア急ぎませう」と己れを唆かした。足は急に速められた。

日本橋の柳屋に客が馬鹿に多かつたので、ツイ釣り込まれて入つた、そ

ここに可愛い、人形があつたので、奥様は静子に買つて呉れた、静子は俄かに懐き出した。

直ぐ出て三越へ向ふ、途中で佐藤君にビタリと合ふ、素的滅法な新夫人を携帯してゐた、よつぽど嬉しかつたと見えて、此方が氣が附かぬ裡に向ふから聲をかけた、屹度妻君を見て欲しかつたらう。如何にもいいぞ。

三越では直ぐ食堂へ入つた。

己れはもう少し此の妙子さん問題に就いて奥様と意見を交へたかつたんだけど、遂に機會を得なかつた。

この日は静子一人の爲めに賑かに閉ざされた。

○

有樂座に峯的ない、狂言が懸つた、翻譯物であるが評判が馬鹿によかつた、行きたい行きたいと思ふてゐたが、いゝ連れが無くて控へてゐた所、恰度高子さんから外の用事のこと電話がかゝつて來たのを機會に行かないかと勧めて見た、すると彼女は大喜びで、私し執麼に行きたかつたか知れないのよ、まア嬉しいと飛び上がり、妙子さんもお連れ申したら何う？ と云ふから、それや賑かで結構だと、妙子さんの家へ電話をかけて、この由云ふと、まア嬉しい私し眞個に行きたいくで腹一杯でしたと云ふ返事だ。そして高子さんも一緒だと云ふと、あの方には随分暫らくお目にかゝらないんですもの、逢ひたくてく仕様が無かつたの、なんて嬉しいことが重なつたんでせうと、聲だけ聴いてゐても愉快さが充ち満ちしてゐた。

恰度高子さんが有樂座近くに序があると云ふので、切符を頼む。
すると開演に一時間程前だった、高子さんが訪ねて来て、

「貴方も食事どこでなさるお積り？」

「どこがいいだらう」

「何處でもいいわ、でも時間が其處に無いんですから」

「ステーションホテルにしようか、風月の食堂へ行かうか、それとも村井が？」

「どちらでも」

二人は色々考へた、ステーションホテルは拙い様な気がしたし、風月は時間がかかる様に思はれたし、矢張り馴染の村井の東洋軒が一番いい様に思はれた。高子さんも己様の様に和食が嫌ひだ、洋食だと何處で

も賛成だ、二人は村井へ行つた。

その劇は始めから見なくちや不可ないので、出来るだけ時間に合ふ様にと、二人の心は何んとなしに急わしかつた。

入つて行くと、只今満員ですから、一寸お待ち下さいと云ふ。それではと休憩室に腰を下ろして待つてると、鐵道省の參事連中がひよつくり遣つて來た。

「ヨー」と、水野君時ならぬ己れの姿を見たので驚いて聲をかける。

「やアー」と、鐵道省でも文筆の方で有名な石山君が同じく近付いて來た。己れは失策つた所を見付られたとギョツとしながら、

「やア暫らく」と云ひながら立上がつた、二人の後から見知らぬ顔が二つも續いた。

水野君は己れが高子さんと一緒に坐つてゐたのを知つたと見えて、その隅の方へ其れとなく腕を引張りながら、小さい聲で、

「あれ誰だい？」

「誰れつて友達さ」

「何んの友達だ、君の何にかい？」

「何んでもないよ」

「隠すな」

「隠すもンか、云はゞ女の友達さ」

「臭いんだろ」

「何云つてるんだい、公明正大なもンさ」

「フン」と、鼻で弾いて、

「ま、何んでもいいや」と、横眼に高子さんを見て、

「可愛い、顔してゐるな」

「い、顔だらう？」

「賞めて欲しいと見えて一生懸命になつてゐやがる、何も云はぬ」と、

云ひながら又ジロリ、石山君は唯ニタリ／＼と聽いてゐた。

「空きまして御座います、どうぞ」と、女給仕が呼びに来た。

「ちやち先さ」

「あつさうか、失敬」

二人に別れを告げて、高子さんに眼配せするが早いのか、スタ／＼と廊下を歩いて食堂へ出た、ボーイに案内されて一隅に座るや否や高子さんは「どなた？」と訊く。

「あれ？ 鐵道省の友人連さ、貴公子見たいな顔してゐるだらう、學生時代から有名な好男子さ。あの髪を綺麗に別けてゐた方が大學を三番で出た男、モ一人座つてニコニコしてゐたのは石山と云つて一番で出た男だ、どつちも秀才だよ」

「御紹介して下さいな」

「その時間が無かつたぢやないか、あとで若し又一緒になつたら其の時」

「え、何卒」

食事をしてゐる裡に時間が大分切迫して來た、妙子さんには先刻二度目の電話で、誘ひに行くと云つて置いたんだが、之れぢや誘ひに行つてゐたら、又遅れて了ふ。どうしようかと相談した學句、食事最中であつたけど、己れは電話室へ駆け込んで、實は斯うくで高子さんと食事へ來

てゐる、貴女の宅へ遅くなつて寄れ相でないから、濟まないが今から直ぐ有樂座の前まで一人で來てくれないか、執方が早いか解らないけど早い方が前に待ち合はすことにしようと思つた、妙子さんは承知した、先づは之で時間が大分經濟になつた。

食事を濟ませて、高子さんの紹介の爲めに一寸休憩室を覗いて見たけど先刻の連中がゐなかつた、煙草も碌に喫まずに外へ出た、開演に十分前である。

白木屋前から電車にと思ふたが、容易に來なかつたので、呉服橋まで歩いた、そこから乗つた。有樂町で下りて己れは一寸した買物があつたので、寄道してゐる間に高子さん丈先きに遣つた、一足遅れた己れは急いで追ふて來ると、受附の所に二人はヂット待つてゐた、一人は妙子さ

んだ。妙子さんは己れの姿を見ると急いで階段を下りて来て、
「どうも有難う御座いました」と、其の可愛い口元に微笑を湛へて挨拶の辭を述べた。

「大分待った？」

「いえ、五分ばかり」

「済まなかつたね」

「いえ、一寸でしたもの」

高子さんはお話は後でなさいましと云つた具合な焦慮を眉に見せてゐたので、慌てゝ妙子さんと手を握り合つて駆け付けた。

幕はもう明いてゐたので、廊下はひっそりしてゐた、二階の一等席へズラリと着席する。

眼を舞臺へ放つと勘彌が出てゐる、村田嘉久子が出てゐる、どつちも己れの好きな優だ。舞臺を引き立たせる爲め、場内は薄暗かつた、人の顔が充分解らなかつた。

「いゝ背景だわ、素敵ね」と、妙子さんは私の膝を叩いて小さく斯う囁いた時、私は隙かさず其の指をグツと握つた。

「オヤ冷めたいね」と、高子さんに知れぬ様に耳へ囁いた、私は二人の真中に座つてゐたんだ。

「でも先刻から外に立つてゐたんですもの！」と、済まない様な口調で云つた。

「私が暖めて上げませう、私の手は温かいんですよ、温かいでせう？」
「えゝ」と、頷きながら強く握り返した。二人は時々ゆるめたり強めた



君は先刻から正面ばかり見てゐ
 るよ
 握るよ
 二兎を
 追はつ
 さま

りした。

いつの間に之を見たのか、高子さんが私の小膝をツ、きながら、耳元へ口を寄せ、

「握手してゐらつしやるの？」

「ウム」

「早いねえ、驚いた」

「君とも握らうか」

「嫌だわ、二兎を追つちや」

「ぢや君は駄目」

「あら此方から云ふことだわ」

「どうして握手してゐるのが解つた？」

君は先刻から正面ばかり見てゐ

「たぢやないか」

「でも其變事解らない様な私ぢやないわ、何んだか右のお肩が時々動いてたものだから」

「油断がならないなアー君は？」

「貴方こそ」

二人はニツと笑ひだ。

高子さんは勿論私が妙子さんとは戀をするなどは思ふてゐない、たゞ男と云ふものは此變戲むれ其の物が男の快感であると云ふことをよく知つてゐた。

妙子さんは然し今己れと高子さんが此變會話をしたのを耳敏くも聴いたと見えて、慌てゝ握つてゐた手を引かうとした。

「いゝぢやないか」と、己れは振り向いた。

「でも」と、高子さんの顔色を窺ふ様にして妙子さんは逡巡した。

「いゝわ、さうしてゐらつしやいな、ホツホツホツ」と、今度は高子さんが妙子さんに聲をかけた。妙子さんは赤くはならなかつたけど、氣極り悪げな笑ひ方をした。

なんだ肝心の芝居そつち退けに。

「私し一寸化粧崩れを直して来るわ」

斯う云つて高子さんは幕合中だのに立ち上がつて行つた。その姿が見えなくなると同時に妙子さんと己れとは何んの意味ありと云ふ事なしに見合はしてニタリと笑つた。そして手は互の手を求めた、二人は今だと云はぬ許りに強く握つた。

突然後の扉がカタンと音がした、そらッ高子さんがと許り妙子さんは慌て、振り放つて後を見た。

「高子さん？」と、振向かなかつた己れは訊いた。

「いゝえ」

二人は又求めた。手ばかりぢやない斯うして握手してゐると胸の中までがボカ／＼あたゝかくなつて来る。

「妙子さん」

「え？」

「どんな氣持ちがする？」

「面白い芝居ね」

芝居に託けた所、妙子さんも仲々隅に置けやしない。

そこへ化粧を済ました高子さんが、しなやかに戻つて来て、小さい聲で

「珍しい方に逢つたのよ」と、云ひつゝ、

「學校時代の友達に五年振りで逢つたの、私もお化粧で熱心に鏡に寫つてゐると、そこへ何んだか見覚えの顔らしいのが同じく寫つたの、振り向いて見ると、先方もデツと見詰めるんでせう、そして高子さんぢやなくて？」と云ふんでせう、その聲でハツと氣が附きました、まア美代さん？と云ふと、まア久潤まア久潤と嬉しかつたわ」

「どんな人？」

「色は少し黒いけど、でも綺麗よ、アレ／＼あすこソラ階下のズツと前の三ツ目から右の三人目、黒い毛皮を首にまいてるでせう、あの方よ。

——そら今後向いた方、笑つてるでせう、あの方よ」

成程一女性が此方を見上げてニコ／＼してゐる、遠目はいい。

「今何してゐるの？ と訊いたら女優してゐるんですつて！」

「女優！？ どこなの？」

「〇〇座の」

「名は？」

「森野さくら子(假名)と云ふ人」

「知らないね」

「ツイ近くになつた許しだと云ふんですよ、まだ一遍も舞臺へ立たないんですつて！」

「どうして女優になつたんだろ」

「知らないわ、近頃女優になるなんて變だわねえ」

「獨り者？」

「え、結婚してゐたんですけど別れて了つたと云つてましたよ、そんなこんなで女優をしたんでせう」

「詰らぬことをしたものだね」

「さう、さう、貴方に紹介して欲しいと云つてましたよ。私に誰方と一緒に仰しやるものですから、奥野さんと云ふ人と、外に美しいお嬢さんと申しましたの、すると奥野さんて奥野他見男さん？ と訊くんでせう、え、と云つたらちや逢はして下さいと云つてました、貴方も美しい方だつたら、逢つてもいいと思ふでせう、ホッ、ホッ、ホッ」

「しッ一寸素的ぢやないの」と、二人が話に夢中になつてると、妙子さんが急に聲かけて舞臺を顎で指した。見ると美しき青年と令嬢が、父の

眼をかくれて月明の庭に溶けむ許りに戀を囁いてゐるのであつた。「私の好きなAさんよ、貴方は何うして其處に美しく生れたの」と女が男に云ふた、貴公子の面影を持つ青年は答へた「イヤそれよりも貴嬢の聲は何故そんなにいゝ音を私に傳へるんだらう、至るでエジプトの古塔の鐘を夕ぐれの濱邊にさいいてゐる様だ」とお互に賞め千切れる丈け賞め合つてゐる。

「私の戀人よ、あなたは貴方は母の愛より何も知らなかつた私に不思議な力を與へて下さいました、まるで天使の群れが神泉のほとりに躍つてゐる様な氣持そして微妙な音樂が絶えず私のまはりに奏でられてゐる様な氣持、Aさん私を見て下さいヂツと見て下さい、私の頬私の眼嬉しさに燃えてゐるでせう」

「オーB子さん 二人はもう満ち切つてゐるのです、私共は喜ばしい、私共は嬉しい限りを今見てゐる、夢ぢやない、あゝ夢でないのだB子さん」

「えゝAさん」

二人は突如抱き合つた、接吻した。

「どうだい妙子さん」

「……………」

彼女はたゞ會心の笑みを洩らした限りであつた。

「どうです高子さん！」

今度は高子さんの方を向いた。

「まア、ねえ」と云ひながら、感激と憧憬に其の眼は熱し切つてゐる。

た。いつしか私の両方の手は二人に固く握られてゐた。幕合の時間に廊下で森野さくら子さんに紹介された、彼女はニツと笑んで進んで来た、眼が美しかった。外に高子さんが一人の男を己れの前へ連れて来て「矢つ張り私のお友達よ」と云ひながら、

「この方に今日有樂橋でピタリと出合つたの、今夜有樂座へ行くのよと云つたら、ぢや僕も是非と仰しやるんでせう、だから私共の切符はもう買つて了つて座席が定まつてゐますから、若し離れてゐても好かつたらいらつしやいなと申上げて置きました所、屹度行きますと云つていらした方です、杉山さんと仰しやいます、此方が奥野さん」

その男は見るからに優しい美しい男だつた、何んだか一見役者の様な気がした。

高子さんには此處友達もあるのかと己れは意外に思ふた。一同を誘ふてコーヒを飲み、コーヒを飲んでから三階へブラ／＼行くと、

「オヤまア暫らく」とお菓子店のおかみさんが聲かけた。

「オヤ二階から三階へ變つたんだね、私し何日も来るんだけど、三階へ来たことが無いものだから、おかみさんが此處にゐると知つてゐたら」と、微笑すると、

「この間も或るお客様が、オヤ／＼二階に店が無くなつたと思ふたら、此處へ来てゐるのかおかみさん、逢ひたかつた／＼と云ふんでせう、そりや皆さん吃驚してゐらつしやるの、え、帝劇の經營になつてから此處へ移されて了つたの、本當に暫らくでしたねえ」

「私も逢ひたかつた仲間の一人だよ」

「嬉しいわ、皆さんから此處に大持てぢや皺クチャ婆さんもチとお化粧でもしませうか、ホッホッ、ホッ」

「おかみさん」と、高子さんも聲かけた、おかみさんは見た。

「オヤ之はまアお珍らしい」

「こゝにゐらしたの？ 少つとも知らなかつたわ」

「どうぞ御最負に」

「精々勉強しますからでせう？」

「オホッ全くですわねえ——此方と御一緒？」と、己れを見て高子さんに云つた。

「え、此方は私の可愛い良人ですよ、オホッ」

「私は旦那だよ」

「これはく左様ですか、そして有樂座へ今夜は新婚旅行ですか、たまらないわねえ」と、戯談やらお世辭やら、いつも變らぬ面白いおかみさんだ、そこでお菓子にチョコレートを飲んで、大におかみさんを流行らせる。皆慶は其處で暫らく話し、た。

その裡開幕の呼鈴が鳴つた。

その芝居は入りは割合に少かつたけど、観客は熱心で且つ静かであつたので、劇その物の精神がよく味はひ得た。

閉場て外へ出ると中天に月がかゝつてゐた。

杉山君のみは道が違ふので、お先きへ失敬して了つた。三人は有樂座側の細道を通つた。己れが案内したのである。

「こんな所にこんな道があるとは少つとも知らなかつたわ、近道ね」

「私も知らなかつた」と、高子さんも妙子さんも云つた。

「どこまで御一緒か知ら」と妙子さんが。

「御一緒ぢやない貴女を二人で見送りするんです」

「あらいゝことよ、もう結構ですから、まだ早い時間だし、それに此處に明るいですもの」

「黙つてゐて感謝してゐたらいいぢやないか」

「さう、済みません、高子さん済みません」

「全く私もお目にかゝりたかつたし、芝居では悠つくりお話も出来ませんでしたもの、今から他見男さんを退けものにして二人で語らひませう、他見男さんいゝでせう？」

「いゝとも！」と、天つ晴れ襟度を示して云つた、その癖そんな事なし

に美しい二人の真中に圍まれて両方から腕を抱かれながら、暫しなりとも血を躍らせながら歩いて見たかつたのに。

二人は別れて後の経過を夢中になつて話合つて歩いた。

己れは其の後から物淋し相に唯隨いて行つた。

暗さを過ぐると明るみへ出た。

「オイもう同性話は止したら何うだい？」

「淋しくなつたの？」

「解つてるぢやないか」

「ぢや可愛がつて上げませうか」

「ウン可愛がつてくれ」

二人は兩側から挟むで呉れた、オ、之ぞ我が本望なり。

「小聲で歌でも謳つて呉れないか」

「もう忘れちやつたわ、でも妙子さんは」と、高子さんが云ふ。

「一人ぢや氣極りが悪いわ」と、妙子さん流石に逡巡して、

「それよりも話をして行きませうよ」

「何んの話？」

「さうね、他見男さんの戀物語でも」

「ば、ばかナ、そんな氣の利いたものが己れ達にあるかい？」

「あるかいだつて！ あつてく有り切れないんでせう」

「イヤ本當に無いんだ、誰かそこ等あたりに己れと戀して呉れるものが

居ないかなア」

「ゐるかも知れないわ、ねえ高子さん」

「さうよ、もつと若い男の方だつたらねえ妙子さん」

「オーイ助けてくれ——」

妙子さんの家の前まで来て「左様なら」と云ふと「一寸お待ち下さ

い」と云ひながら奥へ駆け込んで行つた、屹度母に挨拶させようと思ふ

たんだらう、けれども彼女は直ぐ失望した姿を現はして、

「小母がゐないの、では有難う御座いました」

「左様なら、良い夜明けをお迎へ遊ばす様」と、己れは高子さんの口調

を真似て態と云つた。

「まア此の方は」と、高子さんは打つ真似して、

「ぢや左様なら、又ね」

「左様なら」

二人が其處を離れるまで、妙子さんは門前を去らないで見送つてゐた。次第に遠ざかつた。

「ねえ高子さん」

「え？」

「妙子さんは二人限りになつた姿を羨し相に見てゐたよ、何か臆働しないか知ら」

「するかも知れないことよ、してもいゝぢやないの？」

「ホツ君は割合に平氣だね」

「戀仲で無いから平氣なのよ、貴方は妙子さんに持てたいから、其處事を心配なさるんでせう、大丈夫よ、その裡屹度モテますよ」と、擦ぐつたい言草だ。高子さんは或部分まで斯うした皮肉つた事を云つて、そし



その裡屹度

モチますよ

と仲良

て相手が困るのを痛快がる性分を持つてゐる。
 二人は夜の人通り少ない街を思ふ存分擦れ合ひながら、溶ける様な気分を抱いて夜の更けるも知らずに語り歩いた。

○
 その翌日の午後である。私は白木屋の繪の展覧會を見に入つて、二階から三階へ上らうとして、ツと賣場を見るときはなしに見ると、先達神田の青年會館で私の連れの夫人から「後日漸々美しくなつて行く素質のあるお嬢さん」所謂安田春子さんの姿がピカと眼に入つた、そして其の横に外に美しいお友達の流れが一人ゐた。己れは其の流れが沖村さんの姉の方の令嬢ぢやないか知らと思ふた。全くあの時沖村さんに一寸丈けしか逢はなかつた、妹の方は座つてゐた時から「眼の美しい嬢ちゃん」で

顔の記憶があつたが、姉さんの方はホンの沖村さんと話合つてる時チラと見た許り、顔には更らに記憶がなかつた。けれども何んとなしに其の一人が沖村さんの令嬢の様だと思はれて仕方がなかつた、沖村さんの令嬢であるとしたなら、直ちに食堂へ案内して御馳走したい氣がした、それは沖村さんへの詰り好意であらねばならぬ。
 フと春子さんも此方を見た、そしてオヤと云ふ表情を作つた、かと思ふとニツと笑ひだ、私も思はず笑ひだ、よく己れの顔を見覚えてゐたものだと思ふ不思議な氣がした、彼の女が己れを知つたのは己れと沖村さんと話合つてゐた瞬間より外はないのだ、それで知つてゐたと見える。私は意外に感じた。ツカ／＼と進んで行つて、
 「あなたは沖村さんのお嬢さんですか」と、春子さんの流れに訊いた。

すぐと春子さんが直ぐ答へた。

「いゝえ違ひます、あの方は今日いらつしやる筈でしたけど、お見えになりませんでした。アノ貴方は先日は神田會館でお目にかゝつた……」

「左様です、よく御存じでしたね」

「えゝ、ハッキリしたお顔ですもの」

「買物ですか？」

「いゝえ、繪を見に」

「私も！」

「御一緒に参りませうか」

「左様？ ちや一緒に」と、私は思はぬ連れのあつたのを喜んだ。

五階へ行つて一同で繪を見てゐると、「春子さん」と云つて近付いて来た

學生がある、慶應の帽子を被つてゐた。すると春子さんは「お待ちになつて？」と云つた。「少しばかり」と學生が答へた。間もなく又帝大の身體の大きい學生が「やア春子さん」と聲かけた。「あら、私し今來たの」と之も此處で逢ふ約束してあつたらしい。又來た矢つ張り學生だ。春子さんが及び連れの令嬢と見合せてニッコリする。みんな友達らしい、そして時間を定めて落合つたらしい。

今度は己れの友達に逢つた、野上君だ。

「先生」と肩を叩いたので吃驚して振向いたら左様だつた。

「君一人？」

「えゝ」

「一緒に廻はらない？」

「え、何卒」

野上君は神戸で有名な大資産家の子息で、繪に親しんでゐる眞面目な青年だ。彼は己れを先生々々と云ふけど、己れは友達であると云ふ氣を持たしたいと務めてゐる、大分だから相手は其の爲め私に親しみが重ねて來てゐる、育ちが育ちとて言葉使ひが非常に丁寧である、私は眞摯な此の青年が好きである。

繪を一巡して後、

「食堂へ行きませう」と、己れが案内した。春子さんの男の友達連中は何んだが逡巡してゐたから、君だちも一緒に來たまへと誘ふた。それでも氣おくれするのかモジモジしてゐたが、今度は春子さんが「いらつしやいな」と微笑を湛えて云ふと、矢つ張り女の力で偉大なものだ、こ

の優しき妙音に譯もなく一同は參つて了つて、ゾロ／＼と隨いて來た。食堂の一隅を多勢で占めて、

「あなたは安田春子さんと云ふんでせう？」と、眞先に訊いた。

「あら何うして御存じ？ 沖村さんから聴きになつて？」

「いゝや」

「ちや何うして？」

「あまり綺麗だから自然に覺えたんでせう」

「まア知らない、本當に何うして御存じ？」

實は神田の青年會館であの日若い紳士が貴女の姿を見て立話をしてゐたのを聴いたんです、去年鎌倉で、海水浴で友達になつたと云つてゐたと告げた。



「去年鎌倉へは行きやしなかつたわ、鎌倉へは一昨年でした。去年は房州へ行きました。どんな方？」

「貴嬢挨拶したでせう」

「どなたか知ら」と、首を傾げて、

「忘れて了つたわ」と、サツパリする。

「此方の方は？」と、今一人の女性を見て云つた。

「似てゐないこと？」

「え？」

「私の姉妹よ」

「姉妹？ ホウ」

少つとも似てゐない、肉ゆたかな令嬢である。

「どつちが姉さん？」

「私が」と、ニタリと笑ふ。

「本當？」

「え」と又笑つて、

「どつちが姉だか解らない？」

「解らない」

「本當はね此方が姉さんよ」と、姉さんを見て云つた。

「姉妹と兎ても思はれない」

「腹違ひかも知れないことよ、ホツ／＼」と、無邪氣な裡に限りなく美しい。

「貴方のお名前をかかせて下さいな」

「オツと之れ失敬した、私は」と云ひながら、ポケットを探り出して、名刺を一人一枚宛配つた。

「オヤ」と、春子さんは吃驚した様に姉さんの膝を叩いて、

「まア奥野さんよ、他見男さんよ、まア」

「まア」

二人の麗朗たる眸は一時に私の面上に暫らく注がれた。そして少しく赤みを頬に走らせながら、急に氣極り悪げに、

「少つとも存じませんでした」と、モジ／＼して見せ、

「だつて沖村さんが先日貴方にお目にかゝつた時あの方どなた？ とお聞きしたら親類の方のみ仰言るんですもの、だから今しがたまで御親類の方のみ思ふてゐました」と何故か羞かみながら、

「いつも御本はよく拜見してました」
すると姉さんが横から口出して、

「そりや春子さんはね他見男さん黨の旗頭なんですよ、いつも他見男さんて方は何麼人かと許り云つてました」と、私に告げる下から春子さんが、

「だつて其の方に突然お目にかゝつたんですもの」と、夢が現實に變つた様な驚嘆の聲を出して云ふ。男の連中も矢つ張り意外と云ふ表情で己れを見詰めた儘であつた。

「オツと此方を紹介する、野上と云ふ人ですから」と、固くなつてゐる野上君を指して云ひ、

「此方は虎の門一の美人安田春子さん」

「まア」と、春子さんは制する様にして立上つて、お互は首下げた。

「この夏は孰方へ？」

「まだ定めてないの、どこが好いでせう？」

「軽井澤にしたら」

「軽井澤？ いらつしやる？」

「行く積りです」

「ちや私達も行かうか知ら」と、云つてる所へ、

「まアお嬢様つたら、どんなにお探し申したか解りませんわ、いつの間にかお見えにならないんですもの」と、女中らしいのが額に汗して側へ遣つて來た。

「私達よりお前がボンヤリしてゐるからよ」

「まあお口のお悪い……」と、猶も愚痴らうとするので、
 「さア〜腰かけてお菓子でもコーヒでもお喰りなさい」と、私は空いた椅子に女中を座らせて、私の前にあつたコーヒと菓子を其儘かの女に提供した、女中は之で黙つて了つた。察するに二人は女中なしでは出られぬと見える。顔と云ひ此の様子と云ひ屹度良い家庭の姫君たちに違ひない。

春子さんは男の友達の一一人一人を紹介した、みな有名な家の子息のみであつた。かれ等は平生學びの餘暇に斯うした華かな愉快な日を迎へてゐるのであらう、そこには戀もなく唯本當に美しい友達としか思はれぬ爛漫さが宿つてゐた、他愛もないことを云つてはドツと崩れる様の面白さ、あゝ若さものよ高らかに歌へ。

又を期して一同は其處で別れた。

野上君と二人になつた己れは、

「どうだい、あの人達は？」

「先生沖村さんにお逢ひになつたんですか？」

野上君は或る場所で沖村さ丸姉妹や其の父ともよく知つてゐたんだ、私は神田青年會館の事を話した。

「左様ですか、ぢや今のは彼の方達の友達ですね？」

「さうだ」

「どうも先生の會話は旨いものですねえ、少しの隙がないんですもの、大に經驗を得ました」

「こいつあ忍入つた」と思はず頭掻いて了つた。

私は何んもなく満足の轟を禁じ得なかつた、全で豫想し得ぬ清純なそして氣高い、そして又其の唇から匂ひでも潘ぼるゝ様な類ない美しさを持つた此の女性と心ゆく許り語合つたことは我が光榮ある生涯に幸ある頁を與へたものと思はねばならぬ。オ、何んと云ふあの輝きであつたらう、全るで野に咲く白ばらを淡い紅の絹で密つと包むだ様なあの晴れやかな顔！ 私は忘れてはならぬ。

斯うした激刺な生氣と、熱と、華かさが私から離れない間 私は始終生の光榮と喜びを謳ふであらう。生けるものには生ける糧を與へねばならぬ。

あゝ大東京よ、様々の者住める大東京よ、東京は私に様々のものを齎らして呉れる。常に美と喜びを齎らして呉れる。だから私はお前が好き

のだ。獅噛み付いても放さないのだ。日と共に、月と共に、私は嬉しい。晝となく、夜となく、私は嬉しい。私の好きな夕暮の暮よ、今日は静かに下りて来い。

翌日の夕方である、妙子さんの所へ電話をかけた。

「妙子さん貴女お汁粉が好き？」

「そりや女ですもの！」

「今から銀座の若松へ喰べに行かない？ 彼處のは旨いよ」

「行きませうか、行きたいわ、でも一寸お待ち下さいな」と、母の意見を聞いたらしら。

「え、参りますわ」

「ぢや直ぐ誘ひに行くから待つてゐらつしやう」

「お早くどうぞ、咽喉がこそばゆくなつたわ」

「急いでは駄目だ、ぢや直ぐ」と切つて、言葉の通り直ぐ出かけて行つた、妙子さんは待ち疲れてゐたかの様に、己れの聲を聴くと飛び出て来て、「さア参りませう」

銀座の夜は相も變らず賑かを極めてゐた。

繪ハガキ屋の細い道を抜けて、若松へ入つて行く。

「私し本當に久々だわ」

「己れだつて、半年ばかり来なかつた」

階段を上がつて行くと、奥の間に四五人の紳士が盛んに咽喉を鳴らしてゐたが、己れ達の入つて行く氣配に期せずして此方を見た。そして俄か

に嬉し相な表情をした、屹度美人到来と云ふ歡喜に打たれたんだらう。

注文した、暫らく待つた、待つてゐる間に女づれが可成入つて来た、この客種は何日來ても割合に上品だから嬉しい。

お汁粉をお代りして外へ出る。

「旨味しかつたわねえ」と、妙子さんが云ふ。

「これから時々來ようか」

「え、どうぞ、おしるこなら男の方にだつて負けやしないわ」と、意氣軒昂なものだ。

「ねえ妙子さん、今から千疋屋へイチゴミルクを喰べに行かうか」

「イチゴ？ 時飯だから兎ても」

「所があるんだから不思議ぢやないか、確かに己れは先日見て來たんだ」

「さう、あつたら嬉しいわ」

「兎に角行かう、今頃イチゴミルクを喰ふなんて破天荒だからな」

「本當に左様よ、ぢや参りませう」

「本當に左様よ、ぢや参りませう」
 明るい巷に出て、電車道を横切り、右側から敷石を歩いて、灯の街の光りに浸りながらゆるやかに歩く。

「オヤ御覽なすつて？」

「何を？」

「オア御存じなかつたの、それはく何んとも云へぬ上品な、神々しい許りの美人が今資生堂の化粧品部へ入つて行きましたよ、それはく素敵、私し彼麗氣高い方は始めて見ました」

「ホウ其麗に品のいゝ人？」

「え、そりやもう何んとも云ひ様の無い！」

「それぢや知らん顔して資生堂へ一寸入つて見ようか」

「え、私だつてもう一度見たいわ」

己れは一體どんな美人だらうと好奇心に打たれたので、急に歩調を早めた。そして資生堂の中へツカ／＼と入つた、見知りの店員が御辭儀するのに側見も觸れず、たゞ美人いづこそと眸を凝らした。

すると殆んど眼の前に凜として犯す可からざるの威嚴の裡に云ひ知れぬ寛容の顔付をしたる、自ら首の下がるが如き神々しき令嬢の立ち姿を見た。あつこの人だと思ひつゝ己れは思はずハツと驚いて了つた。そして思はず笑顔を作つて其の美人に近づかざるを得なかつた。令嬢も己れを見た、そしてニツと笑ひだ。その笑顔の美しさ、品のよさ。彼女は斯

くしてツと己れにお辭儀した、己れも叮嚀に之に返へした、言葉をかけようと思ふたが、母親らしいのが傍に何か品物を物色してゐるらしかつたので、聲をかけていゝやら悪いやらと思つたので、其儘遠慮して無言に避けた。妙子さんはオヤ／＼と驚いたらしい、そして己れが此慶神々しき許りの令嬢と知合であるといふことに就いて少からず己れに新たに畏敬の念が生じたらしい、そして又自分その者が遙かに及ばざるを知つて聊か氣極り悪さを感じたらしく私には思はれた。

妙子さんと二人は豈夫此の令嬢を見に入つたと云ふのも體裁が悪かつたものだから、態と買物に来た様に「あの香水がいゝだらうか」「いゝえ此方はフランス製よ」など、冷評かした擧句、恰度二階に佛國最新流行糸（頭の）の繪が陳列してあると云ふので、ツカ／＼と上がつて行つた。

一巡視いてから「もう出ませう」と再び下りて來ると、令嬢が矢つ張り階下にゐた。

母親の買物の傍に向ふむきになつて立つてゐた。

己れはも一度その顔を見たかつた、そして別れの挨拶を一寸だけでもしたかつた。幸ひ二人は何うしても其の側を通らねばならなかつたので、己れは態と彼女の視線を引く爲めに靴音荒々しく、そして出もせぬ咳を二つ三つ發して横を通抜けようとした時果して向ふは此の人の氣配に刺戟されて何氣なく此方を見た。するとそれが己れであつたので、又潘るるが如き笑顔を作つて挨拶した、それに應へた私の懇懃さ、あゝ胸が漸つと晴れた。資生堂を出るや直ぐ妙子さんは、

「御存じの方？　まア何んと云ふ立派な品でせう、もう譬へ様もないあ

の氣高さ？ どなた？」

「驚いちゃ不可ませんよ、貴嬢が私とあの方とを知合にさせたんです」

「えッ私が」と、不思議相に見詰めて、

「知りませんわ」

「貴嬢は知らないかも知れません、ちや話しませう」と、云ひながら私は物語つた。私は貴嬢と初対面の翌日帝劇へ行つた、貴嬢がゐなかつたそれぢやと鶴見へ行つた、矢つ張りゐなかつた、そこで空しく歸つた、所が品川から電車に乗つた時云ひ様のない氣高い少女と隣合せになつた、それが今の令嬢であつた。猶青年會館のシヨラのセロへ行つた、不思議にも私共の座席の前に座つてゐたのが矢つ張り今の令嬢であつた、その時二人は口を利いた、それが知合の素である、だから原因は貴

嬢にあるんだ、この點に於て貴嬢には充分感謝する價値がある——。

「まア左様ですか、どこを探したつて、そりや美しい方はゐませうけど彼嬢神々しい品の方はありませんわねえ、お宅どこでせう」

「高田の馬場らしい、電車は高田の馬場で下りると云つてたから」

「お名は？」

「それは知らない」

「何故お聴きにならなかつた？」

「でも其れは何んだか」

「お聴きになればいゝのに？ 屹度著名の家庭のお嬢様かお姫様よ」

「兄が一高、それに妹がゐるんだから、無理に知らうと思へば知れぬことも無いでせう」

「お知りになりたいでせう？」
 「そりや何んと云ふ意味なしに、唯彼嬖綺麗な品位ある令嬢は何嬖人に嫁ぐものかと唯それを好奇心で見たいと思ふてゐる。本當に彼嬖令嬢を貫ふ人は何嬖に幸福な男であらう、どこか此の日本の恐らく屹度多分東京に今現に住んでゐるに違ひない、現存してゐるに違ひない、男冥加とも云ふんだらう」と、己れは戀して見たいと云ふ様なみだら氣を抜いて唯其の品位に打たれて了つた。
 いつしか千疋屋の前へ來た。

「入りませう」

「え、」

二階へあがる。書生が多かつた、デロ／＼見る、女が來ると何うして男

はあゝ躍氣になるんだらう、喰べさしにして見詰めてゐる。

イチゴミルクを注文する、持つて來た、

「どうだい矢つ張り先刻云うた通りだろ」

「え、本當ね、なんて珍らしいでせう」

二人は眞赤な苺を白く牛乳の中でつぶし始めた、赤い乙女の血の様な色が次第次第に擴がつて行つた、その刹那々々の嬉しさ、樂しさ。

一匙スーッと口元へ運ぶ、そして吸ふ様にして口へ入れた、おゝ其の味のよさ。

「妙子さん何うです？」と云ひながら妙子さんの口元を見た。眞赤な小さい其の唇は面白氣に音させて動いてゐる。

「何んとも云へない味、ね、ね」と、如何にも嬉し相、美味し相。

斯くして外へ出た。

「又來ませう、その裡」

「え、是非、頬ぺたが落ち相だつたわ、どんな旨味しいものだつて、あの味には協ひませんわねえ」

「左様かも知れない、天下の珍品だね」

「小母さんに歸つたら大に吹聴させよう、屹度羨しがつてよ」

など、話しながら資生堂の食品部の前を通り過ぎようとする時、

「オヤ」と、妙子さんはビタリと立止まつて、

「あの方がゐらしてよ」

「？」と、己れも止まつた。

「先刻逢つたあの美しい方？」

「どこに？」

「こゝに」と、食品部を指した。

「ぢや入らうか」

「もう何も喰べたくないけど、え、入りませう」と、唯その令嬢見たさに二人は中へ入つた、令嬢は座つてゐた、ビタリと視線が合つた、又ニコリと挨拶する、今度は先刻よりもお互に大分親しみが傳はつてゐた。先方の母は此の時始めて私と云ふものに氣が附いたらしい。變な顔して己れを見た、すると令嬢は笑みを含みながら小聲で母に何か云つた、するとにつこりして私を見た。

屹度令嬢はあの無邪氣な静子の事や青年會館の事を手早く話したものに違ひない、それとも「何日かお話し申したでせう、あの方よ」位に、

豫めあの日の出来事はあの日に宅へ歸つて直ぐ母親に話されてゐたものかも知れない。母親の眼には何んとなく好意が含まれてゐた。もう斯うして顔さへ合はせたら己れには用がないのだ、幸ひ孰の椅子も満員で座る所がなかつたのをいゝ幸ひにして、二人は外へ出た、出る拍子に又令嬢と私は眼で御辭儀の交換した。

「見て居れば居る程威嚴に打たれて了ひます」と、妙子さんはツクツク感心して思はず斯う洩らした、女が女を賞めるのはよくくの事だ。あゝそも何人の令嬢ぞ、何んとはなしに知りたいものである。高田の馬場には美しき君の住めるもの哉。思へば今日のお汁粉は思はぬ人に逢はせて呉れたものだ。何んと私には喜ばしき日が續くではないか。

○

あゝ、何何の令嬢も

と申さ

何んはもゝに知りたいたいものある



高田の馬場

美人さまの住めるものある

次の日。

高子さんと逢つたら「今度の帝劇へ行きませう」と云ふ。

妙子さんにも逢つたら「今度の帝劇は素敵ですつてね」と云ふ。妙子さんは決して連れて行つて呉れとは云はないが、その言葉の裏に「ぢや行かう」と云ふ私の返事を待ち設けてゐる。

好きな二人が私にすゝめるんだ、乃公立たずして可ならむや。

よしと答へた。そして帝劇へ早速電話をかけて一等のいゝ場所があるかと訊いた、すると、二階の正面の「い」の二十七、二十八、二十九が空いてますと云ふ、何んと云ふ好い場所だらう、己れは雀躍りして喜んだ、そして三枚申込んだ、凡そ二階の正面の「い」の番號は我輩嘗て座つたことがない、いつでも賣切れの場所だ、それが何うしたはづみか手

に入つたとは何等の果報だらう、屹度一旦申込んで置いたものが何かの都合で急に取消したのに違ひない。

その入場料は恐らく帝劇始まつて以來、かの支那の名優梅蘭芳が來た時に次ぐ高價なものであつた、恐らく幾程好劇家でも二の足踏む驚く可きものであつた、然し己れは一旦見ようと決心した場合には、そんな事には頓着して居られなかつた。殊に我が愛する者共を喜ばすと云ふ點からでも躊躇が出来なかつた。

己れは其して帝劇の中央に兩手に花と云ふ鮮かなる紳士面をさらさうと思つた、少くも女王の如き美人を控へて彼の黄金で作られたる殿宇の如き中にありたいものだと思ふ心願を久しき以前から持つてゐた、それを實現して見るんだ、他人若しその愚を笑ひたけりや笑へ、唯己れ自身が

其れで満足が出来れば其れでいゝんだから。
 己れは二人に早速、速達で此の旨を傳へた、之を受けた時の二人の喜びは何處ものであらう。彼女等は屹度オ、親愛なる他見男さんと聲を放つて讚美したことであらう。

私は暫らく一人で美しき空想を畫いて微笑でゐると、そこへ一通の手紙が来た、見るとさくら子さんからである。

「過日は本當に好き人とお知合になつたことをツクム、幸福に思ひました（著者曰く好き人とは憚りながら此の己れのことだぞ）私の様な者でもどうぞ貴方の御記憶の一人にさして頂きたら御座います。あの日有樂座から皆さま嘸樂しくお歸りになつたこと、思ひます。實は後姿を拜見して、お暇の御挨拶を申上げようと思ひましたけれど、折角の御歡樂

の御邪魔をしてはと止まりました。高子さんにしろ妙子さんにしろ本當に花の様な美しい方、その中へ眞黒な私がお仲間入りするのも風變りだと思召して何卒遊んで遣つて下さいませ、いづれ近い裡に」

筆蹟可成り見事に走つてゐた。己れは一度讀んで又繰り返してゐると、妻が面會人がと云ふ、誰れだらうと玄關へ出て見ると、意外や僅つた今その主の手紙を讀んだ許りのさくら子女優の來臨である。

「やアー、さア入りたまへ」と、招じ入れて、型の如き挨拶の後、

「この通り今君の手紙を讀んでゐたんだよ」と、云ふと、

「まア恥かしい」と、面とムキ附けられて、流石に氣極りの悪い様子を
 する。

「實は少々お願ひがありました」

「はア、何んです？」

「私共の芝居の切符を買つて頂きたいんです」

「いつです日？」

「十七、十八、十九の三日間です、有樂座で」

「十七、八、九、さア」と、考へて、

「多分都合が悪いかも知れぬ」と、答へた、するとさくら子さんは私は貴方は確かに買つて下さいますと思ふて來たのにと云ふ顔をした。己れは行つて見たい様な氣がしないでもなかつたのだ、然し近頃は大分芝居その物に中毒してゐる。のみならず買ふと云へば一枚や二枚ぢや氣の毒だ、何うしても十枚以上引受けなくちや男らしうない様な氣がする。己れは引受けたからには自分が買つたも同然である。オメ／＼此の面下げ

て君買つて呉れないかと歩けるものか、歩いて歩けない事もないが、「ぢや君あの女優と變なんだろ、怪しいぞ」と痛くもない腹を探られちや、アレー人殺し。

「どうも其の頃になると私は旅行して留守かも知れませんが」と、旅行で胡麻化した、體裁のいゝ胡麻化し方である。

「然し折角斯うしてゐらしたんですから、いゝ方法を教へて上げませう、妙子さんと高子さんの所へ幾枚でも送り付けて何卒宜しくと仰しやつて置きなさい、私が後は萬事いゝ具合にして上げるから」と云つた。すると一旦沈みかけた氣色は又生氣を見出して、

「それでは何卒、でも高子さんは仲の好かつたお友達ですから、郵便で送つて構ひませんけど、妙子さんは先日始めてゝすから、今夜でも私し

お伺ひしますわ、お宅は何の邊でせうか」

「それから私も今夜遊び旁々行かうと思つてゐますから、その時幾枚でも引受ける様に云ひませう」と云ひながら七時までには屹度ゐらつしやいと云つて地圖を書いて渡した。彼女は喜んで歸つて行つた。

晩、妙子さんの家へ訪ねて、さくらさんが来るからと云ふと、それならと慌てゝ部室の整理やら菓子を用意やら、準備オサ／＼怠りなかつた。然し待てど暮せど來なかつた、己れはムツとした、早速手紙を書いて出した。

「あれ程念を押して置いたのに、來ないと云ふことがあるか、失敬だぞ君は。約束と云ふことを何んと思つてゐるだらう。妙子さんの家では君が來ると云ふので、母娘が外出も控へて總てを整へて待つてゐたんだ

ぞ、それ許りぢやない己れに對してゝも濟むと思ふてゐるか、始めて君に遣る手紙でガン／＼怒りたくないけど、君の精神が宜しくないから教育旁々一本突込むんだ、たゞし己れは君の違約に報ゆるに、札一枚引受ける様に頼んで置いて遣つたぞ、此の厚志を何んと見て呉れる？」

翌朝速達で、「何んともお詫びの申上げ様もありません、實は先生昨夜お稽古がツイ遅くなりましたの、私だけ早く歸るとも云へず、氣が／＼りながら到頭失禮致しました、どうぞ御機嫌をお直し遊ばして下さる様に。あゝ私し何うしたらいいでせう？」

己れは最初ムツとして齒を喰ひ縛つて讀んだが、だん／＼顔が絆れて來て、あんまり嘔鳴つて遣つたのを氣の毒になつた、そして一旦斯うして先方を畏縮させた以上は何うしても、お互に親密の情が湧いて來まいと

觀念すると何んだか惜しい様な気がした、まあ仕方がないと諦め、夕方の帝劇行を楽しんでゐると意外なことが起つた。それはもう行かうと云ふ眞際になつて、二人の友人が訪ねて来て、

「君、今日帝劇へ行かないか」と、さまで此變物に興味を持たない癖に此變事を訊いた。

「行かないよ」

「行きたまへ、僕等も行くんだから」と、云ふ。この連中よくあの高値の切符を好きでも無いのに買ったものだナと思議相にすると、

「實は切符を五枚ばかり無價で貰つたんだ、宮野にも白岩にも遣つて了つたんだ、君にも一枚除けて置いたから」と、懐から出して「どうだ嬉しいだらう」と來た。

所が此方は大に嬉しくないのだ。此奴等にあの貴重なる二人を見せたら何變言葉を浴せるだらう、妙子さんの事は身體が小さいから、何んとも思はぬかも知れないが、高子さんはあの肉體あの容貌だから一寸困るんだ、況んや此の内の笹井の如きは既に彼女とは一面識があるのだ、そして一時は變な氣持ちまで抱いたことがあるのだ、今でも隙あらば、近附きたいと思ふてゐるかも知れぬ。その女と己れがピタリ附着いて喋々喃喃々を交はしたのを見たら、彼は淺間山の噴火を見た高崎市民よりも驚くであらう、そして憤るであらう、同時に己れに敵意を挿むことであらう、單に友達附合であるに過ぎないとしつたに知る、その友達になつた其のことが大に氣に入るまいと思ふ。

「詰らん相だぜ、今度のは」と、己れは粟よくば中止させようと思ふて

云つた。

「なアにを云つてるんだ、新聞でも何んでも大した評判だ、君が行かないと云ふなら君の分の札は外の者に遣つて了ふ、どうせ僕等は行くよ、君無代なもの！ ぢや君は止すんだね？」

「どつこい己れも行く、さア呉れたまへ」と、慌てゝ手を出した。

己れが行かないと云つても彼等は行くと言へば仕方ない、先方へ行つてから飛んだ暴露を見るよりか寧ろ素知らぬ顔を定め込んで、皆慶と一緒に乗込んだ方が安全だが、さて何んと云ふ馬鹿を見たことであらう。おかげで夢の様な楽しい空想の實現が滅茶滅茶になつた。

己れは泣面して、買つてあつた切符を妙子さんのお母アさんに進呈することにした、お母アさんは時ならぬ福音に聲をあげて大喜び、濡手に粟

とは此の事で御座いと嬉し紛れに犬の頭まで撫で廻はし、「お、ジョンやジョンやお前うれしいだろ？」ジョンは何が嬉しいのか、さつぱり解らぬと云ふ顔付だ。

斯く帝劇へ行つた、己れは外の友人の手前、云ひ含めて置いたものだから廊下で高子さんや妙子さんに出會しても他人みたいな顔してゐた。

何んと云ふ詰らぬことであらう。そしてコツ／＼と石の様に堅い笹井や影山の膝に押付けられて、「世の中は何故斯う急に變つたのか」と許り大に憤慨して舞臺を見た、少とも感興を牽きやしない。フと後を見上げる、高子さんは「私だつて貴方がゐなくちや」と云ひたげな不足齷をしてゐる。妙子さんも「小母さんと一緒ちや」と同じく大に意を強うせぬらしい。矢つ張り異性の己れに来て欲しいぢやろ、お、おれだつて此の

丸太みたいな足に挟まれてゐるよりか………。

せめて皆慶と後で一緒に歸つて、最後の幕切れだけでも美しく飾らうと思へば「オイ一緒に歸つて遣るよ」と飛んだ所で友情の厚い所を浴せられて厭とも云はれず、「ム、ム」と云つた限り、初めからお終ひまで氣分の優れないこと。

成程世の中と云ふものは悪いことの出来ない様に仕組まれてあるものだ
 哩。

それから暫らく高子さんにも妙子さんにも逢ふ日が無かつた。

○

四五日の後、又妙子さん親娘に逢ふと、

「私し共明日小田原へ行きませんが、いらつしやいませんか」と、突然の

話だ。

「本當ですか、何故急に行くんです？」と、意味あり氣に見詰めると、

「何故つて、一寸」と、後を云はない。

「あー中學生が彼處の別荘へ行つてるからでせう？」

「そんな譯でもありませんが」

「もう白状したつていいでせう？」

「白状だなんて、決して其慶」

「隠したつて駄目ですよ、私し知つてるんですよ」

「それもあります」と、到頭冠を脱いで了つた。

「宿屋ですか、借家へいらつしやるのですか」

「借家だなんて」

「だつて何日か其慶事を仰しやつたことがあります。
ズツと前、確か明治座の歸りに、そら終列車でいらしたぢやありませんか、あの時貴女は仰しやいましたよ」
「まア左様ですか」と、それ見る嘘を吐いてゐると、此慶所でバレるものだ。

「一體幾日程の豫定ですか？」

「四五日」

「さうですか、若し行かれたら參つてもいいです」

「是非ですよ、お待ち申してますから」

「多分行かれるだらうとは思ひますが」と、云つて其の日は別れて了つた。

その翌々日、試みに電話をかけて見ると、どつちもゐない、矢つ張り行つたらしい。恰度その頃己れは一夜泊りの旅をして見たかつた頃合だつたから、フと行つて見ようかナと思つた。そして試みに云はれた旅館の名をノートで見た、△△館とある。己れの嘗て一度泊まつた家だ、のみならず、其のおかみさんとも大變懇意なんだ。だから至つきり知らない家でないので、ツイ惹かされ氣味を覺えた。

そこでフイと着のみ着の儘で出掛けて行つた。小田原で下りて車を呼び、車に乗つた旅館に着き、「斯うくした方がゐませんか」と訊くと、出て来た番頭ジロく、己れの姿を見て、

「御婦人の方お二人丈けですか」と、云ふ。

「左様だ、その御婦人の方だ」と、答へると變な顔をする、そして居る

と答へていゝものか悪いものかと一寸思案顔して、
「お名前は？」と、きた。己れは云つた。

「一寸お待ち下さい」

「一體今ゐるのか、ゐないのか」

「さア、ヒョツとするとお出掛けになつてゐらつしやるかも知れませんが」と、何かと態度が煮え切らない。その裡スウと姿を消して了つたかと思ふと、今度は全つきりペコ〜出て来て、

「へい〜、どうぞ此方へ、お芳さんッお客様を十三番へ御案内——」
なんと云ふ現金な奴だらう、己れは唾でも吐き付けて遣りたくなつた。
利巧相な顔してゐるが、詰らぬ方面へ利巧が走つてるものだ。
お芳さんと云ふ田舎の女中としては感じのいゝ色と姿を持つた脊の小柄



之伸

なのが涼しい眼をして己れの靴を脱ぐのを見詰めながら、脱ぎ終ると、
 「どうぞ此方へ」とイソ／＼と先に立つた。
 「此家のおかみさんは近頃東京から来ないかい？」と、歩きながら後から訊いた。おかみさんは平生東京に住んでゐて、一切は番頭任せにしてあるんだ。

「今日ゐらつしやいましたよ」

「ホッ？ さうか」と、驚くと、

「ツイ先刻の汽車で」

「それぢやおかみさんに斯う／＼云ふ者が来たと序の時に云つて置いてくれ」と、己れの名を云つた。

「畏まりました」と、云ひつゝ、小走りながら、聽てビタリと立止まつて

「どうぞ」と腰を屈めた。

ヌーッと入つて行くと、

「まア——よくこそ」

「まア——よくこそ」と、母娘二人同時に同じいことを云つて立上がり、

「大方今日あたり被居るかも知れないよ、と妙子とお噂をしてゐた所な
 んですよ、よくまア」と、相變らず旨いものだ。

「妙子さん何うだい？」と、何とはなしにニタリとした。何を何うだいと訊いたのか解らないけれど妙子さんもニコリと返した。

「素敵にいゝ所を占領してゐるなア！」と、感心しつゝ己れは四邊を見廻した。

部室は八疊と十二疊の二つであつた、波の音がザッ、ザッと聽える。十

二疊の真中の大テーブルの上に密柑の山盛りになされた色が鮮かに眼を射つた。

「やア何うして此慶澤山密柑が」と、云ひつゝ搥ツかと座り、

「どうだい妙子さん、己れが来たので嬉しいかい？」と、訊いた。母親は早速お茶を入れるに餘念ない。

「そりや嬉しいわ」と、大きな聲で云ふ。

「何うして嬉しい？」

「だつて淋しかつたんですもの！」

「淋しい筈はない筈だ。例の中學生が来てゐるぢやないか」と、ボンと一本突込んで遣ると急に氣極りの悪い様な嬉しい様な變な表情をして口を噤んで了ふ。

「来る早々から其麼に大事な娘を意地目るものぢやありませんよ」と、笑ひながらお母さんは「番茶を一杯」と云ひながら湯氣立つ熱いのを勧め、

「あの御飯は？」

「勿論まだですよ」

「まア相變らず恐入つちまうわ、勿論とは驚いた」と、云ひながら、呼鈴を押して女中を呼び、早速夕飯の支度をと命ずる。

「来ましたか、例の中學生が？」

「え、見ました」

「石尾と云ふ姓でしたね、名は？」

「篤さん」

「愈々以つて仲よくなりましたか」

「え、仲のよい所の騒ぎぢやありません、來ますとね全つきり私を邪魔者あしらひにして妙子と二人限りになりたがるんですよ、本當に若い者には年寄が邪魔になると見えませぬ」

「そりや左様ですとも！ 其慶時には氣を利かすものですよ」

「え、だから仕方がありませんから、寒いのを我慢して出たくもない外へ出て見たりしてゐるんですよ。」

所で是非お話し申し上げなくちやならないことが出來たんです。まあ聽いて下さい斯うなんですよ」と、グイと番茶を飲み乾して、机に肱を預けながら母親は語り出した。

「本當にお恥かしい話ですが、今度は妙子より私の方が總かり篤さんに

戀をしてつたんです、つまり好きになつたんですね。いくら貴方でも二三度逢つて御覽なさい、そりやもう可愛ゆくて／＼ならぬ様になつて了ひますよ、それ程純な懸命な優しい子なんですすよ。

所が此處へ立つて來る前夜私は一人ぼつちになつてツク／＼娘の將來のことを考へたんです。恰度その以前から妙子の學校の先生から是非お宅のお嬢様を嫁に欲しいと云ふ方があるんですが如何でせう、先方は何んでも幾十萬圓の資産家で、高商出で次男で三井へ出てゐる品行のいゝと云つた様な全で至れり盡せりの人です、たゞ年齢だけは卅三ですけど、此頃は別に年齢の懸隔なんか兎や角云ひませぬからねえ。

それと篤さんと孰方がいゝかと靜かに熟考して見たんです。ところが一方がいゝと思へば一方で招く様に思はれ、すつかり頭腦が痛くなりまし

たよ。でも篤さんの方は何分身分が格段の差でせう、それに年齢が十八ぢやね。それも我慢した所で、もう直ぐ洋行させて了ふと云ふんでせう、洋行中に何う氣が變化するものやら。洋行して歸つたわ、急に妙子がイヤになつたわ、貫はんわとあつちや折角待ち設けてゐて大事な婚期を遅らしちや虻蜂取らずですからねえ。さア何うしよう斯うしようと色々考へたんです。

到頭一晩まんじりともせず考へた擧句が、潔よく斷わつて了ふのがいゝと思ひました、それで先方では何うかして本人の氣を紛らさむ爲めに急に洋行させることにしたんです、少くも妙子と云ふものを忘れさせむが爲めに急に洋行など、云ひ出したんです、でなくちや十八や其處等で洋行して何になるものですか。だけど私共の方へは勿論そんな事を云ひま

せん文學外交の研究の爲めと申してゐます、又本人にも左様聽かせてあ
るらしいんです。親は何うしても本人の頭腦から妙子と云ふものを薄め
る様／＼とかいつてゐるんです。

然し今それを感付かれては本人が急に洋行しないと駄々をこね始めるか
ら、何うかして私共の方から、つまり妙子がそれではと云ふ態度を執ら
ぬ様に此方を巧みにあしらつて被居るんです。早い話が此方が旨々手に
乗つてゐるんですよ、そんな馬鹿な話があるものですか。

ですから、恰度小田原へ来る當日の朝、篤さんが見えました、幸ひ妙子
も留守でしたから私が應對して、折角ですが斯う／＼した縁談があるの
で、其の方へ妙子を遣らなくちやなりませんから、今日までの事は何事
もキツパリ諦らめて下さいと斯う云つたんです。

すると、まア何んとした事でせう、突嗟わーッと泣き崩れて、小母さんは非道い、僕を欺いてゐたと云ふが早いか、いきなり被つてゐた帽子を投げ付けるやら手鞆を舞き散らすやら大騒ぎ。そして小母さん、小母さんが其慶事を今仰しやると小母さんの家庭にも又僕の家にも大悲劇が生じますよと恐い言葉を残してブイと立上つて行つて了ふんです、屹度若し駄目だつたら自殺しようと思ふたんでせうね。

それから早速家へ歸つて母に一細を話して何うしても妙子さんとは婚約をして呉れないなら僕は断じて洋行をしないと駄々を張つた相です。母も其の顔色と其の唯ならぬ氣配に吃驚して、早速會社へ出てゐる父を至急電話で呼び寄せるやら、もう大變な騒ぎ到頭それ程お前が云ふんだつたら、此の婚約は承知して遣ると云ふことになつて、其の日の午後でした

先方から來月の十五日に結納を取り交はして貰ひたいと云つて來たんです。そして理が非でもモ一つの縁談の方を破つてくれと申されるんです。實に非常に考へたんですが、それ程に今度は兩親に云はれるものを今更退ける譯にも行かす到頭承諾したんです、だからもう定まつて了つたんですよ。そして其の日直ちに篤さん一家は豫定の通り此の小田原へお出になつたんです。私共も豫ねてから篤さんからは是非とお誘ひがあつて承諾をしてあつたのですから、そんな此慶のゴタ／＼でしたけど、急いで此處へ遣つて來た様な譯なんです」

「ぢやもう妙子さんは石尾家若夫人でゐらつしやいますね、お目出度う御座います」

「あらまア其慶急に言葉を變へたりなどして」

「イヤ謹んで敬意を表しなくちや」

「まだ確かに定まつた譯ぢやなし」

「一體いつ洋行するんですか」

「來月の十七日に」

「すると結納を取交はして二日後ですね」

「えい」

「電光石火ですね」

「えい、何が何やら呆として仕舞ひますよ」

「食事が済むでから、母親はお風呂へ入りませうと云つて己れと妙子さんに勧めた。えい、行きませうと無雜作に立上ると、妙子さんは何んだか逡巡したかと思ふと、次の間へ行つて「小母さん一寸」と呼んだ、「何んで

すか」と、母は立つて行つた。「まア其慶事構ひませんよつたら」と大きく答へながら、「ねえ奥野さん妙子が一緒にお風呂へ入るのが恥かしいと云つてるんですよ、いゝですわねえ」

「何んだ其慶事位、平氣ぢやないか、何が恥かしいんだ」と己れはサモ事もなげに、そんな事を氣にするなんてと云ふ様な聲を出した。然し實際は内心妙子さんの肉體美を見ると云ふ一種神秘が眼のあたり開かれる様な好奇心で一杯だつた。その造作なげな聲が妙子さんをして躊躇なしにした。三人は廊下傳ひに湯殿へ來た。戸を開いた、白霧でモーツとしてゐる。

「あらッ」と、突然聲がした。氣を付けて其の方を見るとおかみさんだ。眞裸の姿に腰巻一かんで鏡に向つて化粧の眞最中だつたのだ、屹度鏡



に寫つた己れの姿を見て振り返つたんだらう。

「まア此麼姿をして」と、モジ／＼する様を此方は面白相に眺めながら、

「さつき此方へゐらしたと聞いたんですよ」と、軽く云ひ／＼帯を解き始めた。

「私も之から御挨拶に出ようと思つてゐたんですよ、まア飛んだ姿をお見せして」と、幾分氣極りが悪かつたらしかつたので、己れも其れを察して成る可く其方を見ない振りして素早く裸になるが早いか湯槽へ目がけた、續いても母アさん、妙子さん。

先きに沈むだ己れは其れとなく妙子さんの身體に注意した。

「黒い肌を見ちや不可ませんよ」と、云ひつゝ、神秘の君は湯槽を跨いだ。あ、何んと云ふふつくらした肉付きであらう!! そして其の色は白さ、



美しく、滑かさ!!

「素敵だナ」と、云ひつゝ肩に手をかけると、

「黒いでせう、だつて海水浴で焼けたのが未だ取れないんですもの！」

「本當にもう海水浴なんかお止しなさいよ」と、母親もデツと見詰め、

今更氣にしなから云つた。成程よく見ると、咽喉から胸へかけて、肩か

ら手へかけて色は微かに淺黒く見えた。然しそれを除いた部分は全て石

蠟が光りを帯べるが如く艶々しい、洵に泰西の名畫を見る様な誇らしき

肉體である、あゝ之れ以上障つては不可ない。

湯から上ると、妙子さんは「どうぞお先きへ」と云つた。部屋で茶を飲

んで待つてゐると、見違へる許りの化粧して入つて來た。げに美しい、

げにもく美しい。

その美しい君と、母親と、此の私の三人は八疊の間に枕を並べて、更け行く夜の中に静かに物語りながら何時しか眼を閉ぢた、波の音は恰も、「牧神の夜の瞑想曲」の様だ、あのゆるやかさ。

五百萬圓長者

「オヤ」と己れは思はず眼を擦つて再び見た確かに左様だ、
 「オイ吉木君ぢやないか」と、到頭己れは覺悟してツカ／＼進み寄つて
 ポンと背中を叩いて遣つた。彼は吃驚して振向いた。振向くが早いかな
 ツと許り仰天して、
 「イヤア之れは」と二の句も出ない。
 「ど、どうしたんだ、いつ出京來たんだ？」
 「まアそれよりか何うだい此の奇遇は。意外だなア」
 「實に意外だ、一體何うして出京來たんだ、何日來たんだ」と己れは再び訊いた。

「一昨日」

「一昨日来てゐながら己れの所へ知らさないのかい？」

「突嗟で」

「突嗟でも何んでも不埒だぞ、イヤそれよりも意外だなア」

「不思議千萬だ」と彼は無性に喜んで思はずグイと己れの片手を確かり握と締める、己れも強く握り返へした。

抑々此の吉木君と云ふは△△で誰れ知らぬなき五百萬圓長者、而かもツイ先達所有の古船を賣拂つて二百萬圓と云ふ多額を寝てゐながら懐に入れた果報者である。己れとは無二の親友で、出京する前には必ず通知するんだに今度はそれが無かつた。そして偶然茲上野山手ステーションの待合室で逢つたんだ。

彼は毎年春と秋の二回必ず出京するのが例になつてゐるんだ。

然るに今月はそれが無いので、ハ、ア奴さん家は今年は色々な具合で多忙で出られないんだらう、あの男の性ならさぞかし悲觀してゐるだらうと徒然の餘りに時々思ふてゐたんだ。その男だ、それに出會したんだ。而かも今しも電車が出ようとする刹那だから此の偶然の會合たるや實に間一髪を入れざるものと云はねばならん。

「一體今から何處へ行かうと思つてゐるんだ？」

「高橋君の所へ」

「へー高橋君の所へ？ ハテ、不思議だなア、己れも今から高橋の所へ行かうと思ふてゐたんだ、ぢや兎に角乗るぞ、切符を買つたか」と云ふが早い、己れを真先に續いて吉木君もアタフタ駆け、同時に控つ

かと腰をゑろし、互に「奇遇だなア」と前言を又繰返した。

「今度は母も一緒だよ」

「左様か、それは又珍らしい、いづれ己れも逢はう」

「ウン逢つてくれ、母も西川君が何處に變はつてゐるか今度は是非逢はなくちやと楽しみにしてゐるから。君も馬鹿に景氣がいと云ふんだから先づお目出度う」

「オツとそりや云はさぬぞ、今度は二百萬圓儲けたとは豪勢だなア」

「なアにあれば所有船のうちでもお古さ。まだ立派な船は澤山持つてゐるんだよ」と、吉木君巧妙に自慢の小鼻うごめかす、それが嘘でも何んでもなく實際だから、己れも甘んじて受けた。

それから二ツ三ツ話を交換して、その裡日暮りに停止すると、ドヤ／＼と

乗客が入り込んで来る。己れは見るともなしに見た。突然「ヤツ」と思はず驚異の聲を發するが早い、ツと立上がつて、

「オイッ高橋ッ」と呼んだ、思はざりき此處へ今訪ねむとする高橋が乗り込んで来ようとは!!

高橋君は吃驚して此方を見た。すると己れが突き立つてゐるので、驚いて「ヨ―オ」と云ひながら寄つて来ると、横に座つてゐた吉木君が、
「やア高橋君」と出た。

「オヤツ、吉木かア」と高橋の奴眼をくる／＼させて驚いて、

「どうしたんだ、いつ出京来たんだ」と、己れが先刻爲した總ての表情と同じい表情の下に仰天して、

「どこへ？」

「君の所へ？」

「左様かい、こりやい、日に來て呉れた哩。實は己れは今鐵道院講習所で臨時教師を遣つてゐるので特別に今日は早く濟んだんだ」

「先生とは笑はす哩。生徒はお爺さん許りだろ」

高橋君は大學にゐた時高文を通過し、今は鐵道院の若手の錚々たる法學士である。

「それに今日は子供の喰べ初めで家に御馳走がランと出來てゐるんだ、いゝ所へ來たナ、然し奇遇だなア」と、之れも奇遇のお仲間入りをする、實際全く奇遇と云ふより外に言葉が無い、この廣い東京で、而かも同時間に、最も親しい三人の友人がピタリと出會すんだもの。歡喜の聲を上げて田端で下りた。

「何も知らないで不意に來るなんて不都合だねえー」と高橋君が己れの顔を覗くのを機會に、

「實に怪しからん男だよ」と己れは「實に」に力を入れて遣ると、吉木も之れには返す言葉もなく「オイ參つたてたら……」

そんな譯で此變譯でと様々な今度の上京の理由をフム／＼と聽きながら、だんだら坂を登り左に折れて眞直。

「オイ己れの家は茲だよ」と突然高橋君に吉木君は云はれて吃驚、ぐるぐると四邊を急がしく見廻はしながら、

「立派な家に住んでゐるなア」と一寸賞めて主人公の氣持を爽快ならしめ、門をあけるが早いかドヤ／＼と圖體の大きい三人は鴨居に首を下げて入る。

「お歸りなさい」と評判の美しい妻君が子供を抱えて、出迎へに出た所、そこに旦那と己れがゐたものだから、己れを見てにこり「まアーよくこそ」續いて最後に最も大きい圖體の吉木君の顔が現はれたものだから、妻君思はずアレー。

「まア吉木さんが!? お珍らしいわねえー」と頓狂聲を上げるが早いか「幹や、幹」と下女を呼んで逸早く子供を渡し、素早くおのれ先きに座敷へ駈けて客の眼に觸れぬ様に其處等に散ばつてゐる子供の着物を片附け「さア何卒!!」

上座も下座もあるものか、ゴトン／＼と音させてどつしりした身體を下に落付け、さて眸を上げて見るともなしに次室を見ると、見覚えのある妻君のお母アさんと、高橋君のお母アさん。オヤこれはと思ふたので吉

木君と己れとは折角慥へた胡座を又正しく座り直して、叮嚀に其の方向け「暫らく御無沙汰いたしました」。

それが濟むと、平常と打つて變つた此の家の光景に不審の眉は晴れず、密つと高橋君の耳を引張り、それとなく訊いて見ると、

「今日は先刻云つた通り赤ン坊の喰べ初めだから年寄連中をお客さんとして呼んだんだよ」

それで始めて合點いつたり。但し其慶理由であつたら突然の我等武者の侵入は大に邪魔になるであらう、そこで己れは氣を利かした積りで吉木君に小さい聲で「邪魔になると不可ないから歸らう」

「ウン」と如何にも尤もなりと許り返事し、それではと彼はツカ／＼と玄關へ行き、持つて來た土産を運んで來て、高橋君へそれを改めて差出

すのは友人の癖にとバツが悪かつたのか恰度そこへ妻君が茶を持って來たのを機會に、

「これはホンのおしるしで御座いますけど」と云つて差出した。その顔付が如何にも改まつた他所行顔だ。そこで己れは「オイ吉木、君は一寸旨い口上を云ふ様になつた哩、あれで自分ながら内心旨く云ふた積りでゐるだらう」と茶々を入れて混ぜ返へして遣ると、

「君が傍にゐると協はん」と頭を掻き、今度はグツと碎けて出て、

「奥様要するに之れはお土産です、どうぞ」

「まア此變事遊ばして戴いては」と奥様恐縮する其の横合から己れが又飛び出して「とは云ふものゝ悪い氣持ちがしないもので」と横槍を入れる。

「いやアよ西川さん冷評しちや」と云ひながら、この上猶「斯様な事を遊ばしては」など、鹿爪らしく云ふものなら其れこそ又此の己れが何變事云つて戯からうか解らないと許り、早くも「では戴いて置きます」とサツサと證書授與式を終へて了つた。

「兎に角此處で夕飯を食べて、それから三人で銀座へでも行かう」と一決したので己れはフと斯う思ふた。待てよ今ポケットに僅かしか金がない。而已ならず一緒に出ようとするからには今夜は唯事で済みさうにも思はれぬ、ヒョツとすると飛んだ所へ入り込むかも知れないぞ、若し左様すると洋服ではゴツい、瀟洒な和服姿が何變にいいかも知れない、殊に己れは洋服よりも和服が身體にくつきり似合ふと云ふ定評があるんだから、益々以つて和服に限る。

幸ひ奥の方を睨んで見ると俄かの客來に妻君宙返りしてまだ仲々所謂夕飯なるものが急に運ばれて來さうでも無い。そこで己れはツと立上がつて、二人を顧み、

「おれは和服と着代へて來るから、一、一寸待つてゐたまへ、直ぐ戻つて來るから」

「それでいゝぢやないか」と高橋君は眼に角を立てた。

「いや」と首を振つて、

「どうせ後で吉木君のお母アさんに逢ふんだ、其時洋服だと値段の程度が分らない、和服だと女と云ふものはハ、ア今どんな物を着てゐるな位の見當が附く。お母アさんに逢ふ位だから出世の表徴を示して吃驚させなくちや。それで今夜和服を着てゐないと」と、己れは意味深長氣に高

橋君を顧みた。高橋君はそれを聽いて或る謎が解けたかの様に「よし、ぢや早く戻りたまへ」

「ウン」と頷きながら、己れは一目散に飛び出した。

電車に乗つても何だか氣がソワ／＼して仕方がない、懐から娛樂用の書籍を取出して讀まうとして見るが、それも落着かぬ。嬉しいのか何だか知らぬが無暗に氣がハツシヤギ出した、思はず「何をソワつく必要があるんだい」と舌打ちしながら、ヂツと眼を閉ぶつて見るが、さてそれも旨くゆかぬ。眼先に何物かビチラついてゐる様に思はれて仕方がない、えゝツと舌打ちしてヒョツと見ると、正面に呆然何か空想してゐるらしい大學生がある、見覚えがあるが、名を知らない。

弟の友人とは見當附けたが、あまり物も喋つた事のない男だからと、

眼を側に外さうとすると、彼方も氣が附いたと見えて、思はず脱帽して進み来て、

「西川さんちやありませんか」と聲をかけた隣りへ座わる。

「一度弟さんにお宅を訊ねてお訪ねしようと思ふてゐたんですが、今後とも何卒宜しく」と馬鹿に叮嚀だ、君は今大學で何をやつてゐるのかと訊くと哲學と云ふ。

「妙なものをやり出したナ」と己れは變な笑ひ方をする。

「ハリア」と自分も變な笑ひをする。或事に就いて少しく御教示を仰ぎたいことがありますから、いづれ其の裡お伺ひしますからと云つて様々の物語の後彼は目白で降りて行つた。

知らず／＼の中に話をしてゐたものだから、それで漸つと氣も落着いて

始めて端然たる紳士となつたが、新大久保で下車して、自宅へと急ぐ途中又無暗と氣がツ、リ出した。屹度それは遠く相離れてゐた親友に突然出會した歡喜の泉が近頃の平穩な生活に鋭い刺戟を與へたからであらう。

己れは自宅へ入るが早いか洋服を脱ぎ捨て、洋服を脱ぎ捨てるが早いか和服に着代へた。そして、

「オイ妻、金を少し此の中へ」と云つて財布を差伸べた。

「お錢？ 今日には僅かしかありませんわ、わたし要りますよ」

「然し折角吉木が故郷から來たんぢやないか、あれは五百萬圓の財産家だもの、どうせ要ることがあつたつて彼が皆廢出してくれるよ、唯萬が一を慮つて持つて行くんだから」



「さう、ぢや持つて行きなさいな、然しこれを取られたら家は全で無一文よ、そこをよく察しておいて」

「分つたよ、費ふもんか。……オツと有難う、それでは行つて来るぞ」と出ようとする、

「ねえ貴方、上森さんから一週忌の饅頭を持つて来ましたよ」

「饅頭？ 旨味いかい？」

「そりや旨味しいことよ」

己れは此の日、晝飯も食はずに飛び廻はつてゐて、空腹の絶頂に達してゐた矢先だつたから、

「ぢや一つ呉れ」

「ハイ」と云ひながら押入から出して来る。それを受取るが早いカガブ

ーリ。

「旨い？」と思はず叫んだ。

「貴方雨が降るかも知れませんよ」

「雨？」と己れは空を仰いで見て、

「成程ヒヨツとすると降出すかも知れんなア、ちや傘を出してくれ」
妻は出した、おれは片手に傘を持ち、片手に饅頭を掴んで出ようとする
と、

「アレ饅頭を持って出るんなんて醜ともない、お止しなさいな」

「だつて己れは空腹だから」

「幾程空腹だつてそりや餘りだわ」

「いや空腹よりも皆饑は未だかくと待つてゐるから少しでも早く行か

なくちや」

「けど饅頭丈けは……」

「イヤ止めるな。今夜若しかすると少し遅れるかも知れないよ」と云ひ
つゝ外へ出て雨が降らなかつたけど、傘を擴げて前を塞ぎ、「斯うして喰
へば誰れにも分るまい」と云ひながら、片手に持つてゐた大きな饅頭を
ゴクリと頬張つた、そして矢張り氣極が悪かつたので、若しや他人でも
來たらとヒョイと首を擡げて見ると、來る、來る、他人が此方へと遣つ
て來るわい、それも一人ぢやない三人もゐる。若しやあの中に知つたも
のがゐたら大變だ、假令又ゐないにも知る番地でも訊かれたら南無三寶
である、こりや彼等と衝突する前に己れは之れを平げて了はなくちや不
可ねえと思ふたので、少し分量が多かつたけど、手に掴んでゐた最後の

分を無理に押し込む様にして口の中へ入れた、餘り入れ過ぎたものだから、口が動かない、さりととも折角旨い饅頭をムザ／＼吐くに吐かれず、己れの其の時の頬べたつたら、恰も風船玉の様になつた。
 あゝ何うすればいゝかと猶豫の間もあらばこそ兩方は次第々々に近づいた。最早躊躇もならずと己れは思ひ切つて眼を白黒させて、ゴクーンと音させて咽喉元を通過させた、その時の苦しさ、胸が張りさける様になつたので、己れは烈しく胸をトン／＼と仰けになつて叩いた。その時通行人は急病でも起つたのかと許り己れの顔を覗き／＼通つた。漸く生氣に返つて口元を拭ふと、大きな餡がビタリと手に附着て來た。さては今の通行人に知れたかも知れぬと、フィと振返へつて見ると、此方に向いて立止まつてクスツとしてゐる。

「やア」と己れは思はず頭を抱へて道を急いで逃げ出した。

○

「早やかつたる」と云ひながら、己れは再び高橋君の家の人となつた。殆んど小一時間己れは要したにも係はらず所謂夕飯なるものゝ氣振りだに現はれてゐなかつた。返す／＼も突嗟の客來に手古磨つてゐるんだらう。此の日の客分たる可き二人のお母アさん連までが何時しか羽織脱ぎ捨て、御馳走造りの應援である。濟まんアと大に思ふ。だから吉木君と二人は又も腰を上げたんだけど「もう出來上がつたんだから」と高橋君が激しく止めるものだから何時しかグズ／＼。
 廳で再三再四高橋君が急かしたもんだから、愴惶の裡に御膳が運ばれた、餘り呑まぬ連中ばかりの事とて、杯も一杯二杯で伏せて了ひ、早くも

御飯と云ふ有様。

此の家の主人たる高橋君のみは尺に餘る鯛のお焼物に箸を附けたけど、己れと吉木君は附けなかつた、吉木君の理由は知らないけど己れは斯う思ふたからだ、それは最前から幾度も云ふ通り突嗟の襲來である。だから此の肴たるや屹度御客として呼んだ二人のお母アさん連の爲めに故意々々備へ附けたものに違ひない、それを我々が不意に分捕したのである。畢竟するにお二人の分が無くなつた譯である。

然らばだ譬ひ不時の來客であつたにしろ、後で酒盛が開かれた際に大の背景たる鯛の御焼物が無いとあれば如何にも御膳がさびしい。だから己れ等が手を附けずに残して置けば、其處は旨く妻の氣轉で、それをあとにお母アさん連に備へ奉ることが出来るだらうと云ふ推量から左様し

たんだ。然し吉木君の考へはお焼物には手を附けるもので無いと云ふ親父めいた考へから箸を附けなかつたものだらうと思ふ、何故ならば彼の境遇は始終そんな所へ出入してゐるんだから。膳部は「御馳走さま」と云ふ有難い御辭儀の下に撤回された。己れは時計を見た。

「オイ行かう、出よう」と己れは高橋君の小膝をツ、いた。彼は直ぐ立上がった。そして次室へ行つて同じく洋服を和服に着代へた。

三人はそれから家を出て銀座へ向つた。どこと云ふ目當てもなく只銀座へと心がけた、蓋し吉木君みたいな久々で上京して來たもの所謂御入來者を連れて行くには兎も角も一應は銀座へ引つ張つて來なくちや氣が濟まぬ様に思ふのは高橋君も己れも同じ心だ。

銀座で下りた。高橋君は「ライオン」へ入らうと云ひ出した。己れは「ライオン」は餘り氣が薦まないんだけど、高橋君のお馴染の舊くから知合の女給連が澤山存在してゐるのを知つてゐるから、一寸それ等の顔を見たくなつたんだらうと察したので、そこは酢も甘いもよく知つた己れのこととして、勇んでよしと云つた。

三人は丸いテーブルを圍んだ。

紅茶も呑んだ、菓子も喰つた、音楽も聴いた、さア出ようと立上がる拍子に己れは財布を掴み出して「幾程？」と訊いた。そして大方これ位出せば釣銭は充分ある、その釣銭は女給にやればいゝと應揚に構へた、すると何故かその金額を見て高橋君は己れの眼色を見て何事か合圖する様な教へる様な様子であつた、小さく何か囁いた、それは己れには聽えな

かつたけど、多分多額過ぎると云ふ知らせだらうと思ふた。なアに田舎者の吉木君の手前少し位女給に餘計ハヅんだつてと云ふ顔をして勘定書等待つた女給は程なく持つて來た。

「さア之を。残り君に」と云ひつゝ勘定書を見るときも無しに見ると、己れが出した金額より遙かに多額である。眞に眼の玉が弾き出る様な高價である。ヒヤーと吃驚して慌て、己れは財布の中を覗いて銀貨の二ツ三ツを引つ張り出して、如何にも失策つた哩と云ふ苦笑をして銀盆の上へ載せてやつた。そして思はず呟やいた「世の中に此麼高價い所があるものか知ら」。そして更に呟やいた、己れが最初財布を出した時に高橋君が拂ふと云ひ出した、それを無理に己れが拂ふと云つて、彼の手を堅く押へて己れが出したんだ、そしたら此麼失敗をした、馬鹿げた者は己れ

である。その上此の金たるや妻の臍線金を今日は五百萬圓長者の吉木君が傍にゐるんだから己れは決して費はない、唯萬が一を慮つての用意だからと云つて持ち出した金である。そんな悲惨な懐具合をしてゐて止せばいゝのに「己れが出す、己れが」と無理に衆に先んじて斯う云つて到頭それを履行した、五百萬圓長者は知らん顔して噁にも其の時自分が拂ふ様な顔をしなかつた。

三人はそれから又今度は臺灣喫茶店へ目掛けた。此處は時々己れが來る所である、それを高橋君はよく知つてゐる、だから彼は今自分がカフェーライオンへ入つてお馴染の顔を見て刹那の感興を得たから、今度は君の領分たる喫茶店へ入つてやるんだぞと云ふ顔付だつた。何故ならばライオンの外へ出るや直ぐ彼は「今度は喫茶店へ行くぞ」と行つた、その

響きが如何にも報恩的であつた、三人は忽ちにして又喫茶店を潜つた此處には如何にも高橋の推量の通り己れの知つた顔が澤山ゐる、それ等の者は己れを見ると一様に黙禮又は今晚はを發するものだから、吉木君も高橋君も此の己れが豈夫、之れ程までに此處へ來てゐるとは思はなかつたと許り少しく意外な顔をする。

又勘定の幕となつて、今度こそは己れに出させろと許り高橋君は財布を己れに先んじて出した。然し何故か又もや己れはその手をピクと押へて、「此處の呼吸は己れが一番よく知つてゐるんだから萬事己れに任せろ」と云つていつかう聞き入れず、到頭己れ自身帳場へ出かけて勘定を仕拂つて了つた。それには高橋君己れに對して濟まぬと云ふ顔をする、獨り五百萬圓長者は矢つ張り依然として知らぬ顔をキメ込んでゐた。

外へ出て、己れは道々歩き／＼話の合間々々に己れと云ふ人間は何んと云ふ馬鹿だらうと自分で自分が齒がゆくて堪らなかつた。

一體此の三人の裡で己れが一番の貧乏人である、吉木君は正直正銘の五百萬圓長者で而かもおのれその亭主で自由氣儘に費へる身體である、高橋君とて東京で有名な某家の若殿原である、己れ許りだ何時もビイビイしてゐるのは。

そのビイ／＼たるドン尻の己れが一番華手にバツ／＼と潔よく拂つてゐる、五百萬圓君なんか常に幾百と云ふ大枚の小遣を懐にしてゐながら鑑一文出さうとせぬ。

それには高橋君も餘ッ程癪に障つたと見えて吉木君を宿まで送つてから、歸る道すがら、半ば己れに同情する様な口吻で、

「吉木は一體吝者だぞ、己れが五百萬圓持つてゐたら電車なんかに乗るものか、自動車でビュービュー飛び廻はすさ、それに彼奴は何日東京へ來ても未だ嘗て我々に之れと云ふらしいことは一度もしたことは無い、して欲しいとは思はぬが、五百萬圓も家にある癖になア」

「左様とも！」と己れもムカツ腹立つてゐた矢先だから悲憤の聲を出して、

「明日でも大に奢らせようや」と提言した。

「己れが思ひ切つて云つて見よう」と高橋君は合槌を打つて、

「己れ達はまだ親の幾分毎月厄介になつてゐて金は自由にならないんだけど、彼奴は何でもなるんだもの、ウンと奢らせようや。現に今日も一寸それとなく云つて見て置いたんだけど、奴さん何うして溢るんだらう、

「覇氣がないなア」と、親愛なる友人を味噌糞にコキ下ろして、
「兎に角明日は厭無理でも奢らさせうよ」

「左様しよう、大に左様しなくちや」と二人はそれから相談仕始め、明日は先づ築地の緑屋に本陣を構へて新橋赤坂の美形をウンと侍らし、豪華なる一夜を歡樂に耽つて、鬱々たる日頃の心氣を一轉させようと大に計畫を立て、その日は其れで別れ、翌日一定の所で二人は落合ひ、昨夜いづれ明晩は訪ねて行くからと内々聊か香ひを嗅がして置いてあつたら吉木君も其の覺悟して大方今時分は首を長うして待つてゐるだらうと語りながら、兎に角一應今から行くぞと知らさうと相談一決して、早速彼の宿へ電話をかけると、その返事たるや、
「止むを得ざる用事があるから失敬する」

どうだ此の返事は。
無い金を無理に都合して友達を喜ばしてやつた己れの馬鹿さ。
五百萬圓と云ふ大金を思ふ儘に出来る身でありながら、其れを大事に仕舞つておく吉木君の利巧さ。
大きな皮肉、諷刺が眼の前へチラついて来る哩。
然し己れは斯う迄もして五百萬圓に獅噛み付いてゐるよりか、貧乏にもしろ愉快に費つて愉快に日を送る今の僕の生活の方が何處にいゝかも知れない。

この君ありて戀は佳し 終

昭和五年八月三十日印 刷
昭和五年九月七日發 行

この君ありて
戀はよし



著 者 西川他見男

著作權所有者
發行者兼印刷者
玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)